

人生七十仕を致め候

初尾 武

私は三月をもちて停年を迎える。仕を致めるとは仕事を致めるといふ意である。致仕と名詞にしたり、動詞の語幹として用いることの方がむしろ一般的である。七十歳は杜甫の「曲江詩」の一句「人生七十古來稀」によつて「古稀」なる語が有名になつた。七十歳は古人も現代人も深い思入れがある。七十歳は現代人の私においても体力の衰を實感させられる。松尾縫間脂肪肉腫より難病を患ひ、平成十八年四月七日に癌研究会有明病院にて摘出手術を受けた。院長の武藤徹一郎先生消化器外科の名医瀬戸泰之先生呼吸器外科の中川健先生等に見守られて華無きを得た。この病院に入院する前に病室を発見して下つた。この久代先生や聖路加国際病院の蝶名林大和田先生、妻や娘等多くの人々の助力により回復に向つてゐる。また成城大学の同僚が授業の代講をして下さつたこと、学生も優しく見守つてくれて事を心から感謝している。

かつて「百年歌の研究」という稿をのびたことがある。その七十時を見るに、

稱美 頗順 替方徳

いさしいはいつしか天命に従ひ安定し、
体力はなえる。

滌水 明鏡 不從觀

清んだ水や陰りない鏡に映る衰え
姿を見たくない。

臨樂 對酒 轉無歡

宴樂に臨み酒に對しても何とほや
く喜べない。

撥形 羞髮 獨長歎

日はとつまみ皮膚の衰えを感じ
髪の薄さを恥じひとりため息。

と起句、精神は天命はまかせ安定しているが、体力はなえているといふ。論語「爲政篇」は「七十にして心の盛する所に従」とも郷を諭えず」といふ。天命はまかせて安定しているとは、ウツテランのすることは安定しているが、体力が不足しては發展する力もはなさないである。人の力を借りずに物が出来ないのである。これは古人も現代人も変りはない。承句、鏡に映る衰えは姿化粧の力も何ともならないのである。転句では宴樂にも心ときめかないのである。結句はそのまま七十歳の私達の姿を如実に示している。

今更業績を並べたてても何の甲斐がある。是れ私が七十年如何に生きて来たか、その生活史を年譜にしてみたい。

生活年譜

一 誕生より国民学校入学まで

◇ 〇歳より国民学校入学まで

◇ 〇歳一九三六年（昭和十一年）七月二十七日生れ

○ 神戸市林田区（現長田区）重池町一丁目八十四番地に三男一女の長男として誕生。父一夫、母鶴子。父は当時神戸市立真陽尋常小学校訓導、母は市立水木尋常小学校訓導、後に池田国民学校に転ず。父は姫路師範学校出身、後輩に西山松之助先生が居られ、剣道部の先輩と後輩、西山先生は私が成城大学に就任した時、その話を伺った。

その不忠誠を縁に感激した西山先生は東京高師に進まれたが父は一人子であり、軍隊に召集されるのを恐れられた両親が高師に進ませたのである。召集をまぬがれたという。当時小学校教師で一人子であるが、召集をまぬがれたという。あるいは祖母ははの従弟で綾部家に養子が入った綾部陸軍少尉のコンクンもあつたらしく兵役に就かなかつた。この将軍は陸大で恩賜の軍刀をもつた秀才で、ソ連大使館に勤務し大戦中は大本営の参謀であつた。アメリカヤソ連等と戦つてに及対し、同期であつた東條英機首相(中将)と対立しシシカール方面総司令官に左遷され戦後防衛庁の顧問をしていったという。外国特にアメリカソ連に留学や滞在した将軍達は相手の国力を知つていて、戦争に反対したのである。

祖父廉(幼名類吉)は家代々名字帯刀を許された農民であつた。曾祖父の源兵衛の末子(四男)であつた。県立姫路中學校(現学び園文学者三上参次と同級生であつた。尋常小学校訓導になり、後明治四五年(一九〇)より大正二年(一九一三)まで十一年間三方村村長を勤めた。村長は名譽職で収入なく田畠を売り、養蚕や祖母の裁縫等で生活した。家計苦しく井戸辨の状態であつた。父はにまりかて村長を辞めてもらひ、自らも神戸に出て、市立真陽小学校の訓導(教員)を勤めた。

祖母はははの父が山崎本多藩の右筆で、代々その役を勤めていた。何代目か前山崎(兵庫県守東郡)現兵庫県市山崎町には大儒、山崎闇齋が滞在してゐる。御先祖は安海があつたという。私の高校生の頃闇齋屋敷と称する建て物があつた。祖父と祖母は当時としては珍らしく恋愛結婚であつた。祖父の在所は兵庫東郡の山栗の三方村福野であり、平民であつた。一方祖母は士族であつた。二人の馴れ初めは山崎町の日蓮宗の若

提寺でのお参りであつた。祖母の旧姓は志水で、父の名を清水言つた。身分の違いによる困難を克服して結婚したので愛情は濃やかであつた。小学校の訓導と婦人会長を勤めたが体が弱かつた。私の誕生によつて夫婦で神代や三来、これより私は祖父母の愛情を全身に受け、過保護状態になり、箱入娘ともいふ事になつてしまひ、乱暴な男の子と遊ばず、女の子と箱庭作りをしたりまづとして終始した。ただし男女入り乱れで戦争ごころもしたが、軍国の少年には容れなかつた。また祖母は狭いに厳しく人と挨拶するにも、家内では手を着いて、丁寧な言葉を使い、唐紙を聞く時にも膝を突いてするようやがましく言われた。姉妹どうしの挨拶にも敬語を使い、子供心に感心した。

母は島根県八束郡(現松江市)美保開町出身。その父である祖父は沖の島に通う連絡船沖丸の船長をしていて、早世して私に記憶がない。祖母は家計のため若者の置屋をしていて、母は話つてくれなかつたが、かつて若者をしていてはなかつたと思ふ。長男(母の兄)には家を支えようため松江中學校を卒業して漁師になつてゐる。母の上には京都帝大に行き早世した兄と神戸高商を出て熊本幼年士官学校の教授になつた辰雄と神戸工高(後の神戸大学工学部の前身)を出て建築家になり、松本家の養子になつた弟の海夫がいた。母は一年タビストになり、学業の志強き、明治女師範学校に入り、卒業後、神戸市立水木尋常小学校訓導となり、後池田国民学校に転じた。

私は誕生の時一時氣絶してゐたという。母が出生前日まで勤めていて、転倒して臍の緒が胎児の首に巻きついてゐたという。産婆さんが背をよんと叩くと元氣と産声を發したという。父母は大喜びで富士の蛇腹式カメラ(モミライラ)を購入し、生後六日目の写真とカネヲを發している。父はアルバムに何かあつても持参しよう指示している。武と命名されたが、統計上この頃誕生した男

兄には、この名が多いといふ。

私の誕生した昭和十一年は戦争の足音が急であつた。一月十五日ロンドン軍縮会議からの脱退を通告、海軍次官の山本五十六が口配しては脱退が無制限の建艦競争を起し、経済力に劣る日本が窮地に陥つた。この教訓が生かされず、経済的弱小國が國民を犠牲に軍拡競争を行ったことには恐るべきことある。二月二十日に皇道派青年将校のクーデターが勃発し、政變事件である。海士(岡東京オリビック)一九四〇が決定したが、彼(元三)返上、八月に第十一(岡ベリリ)オリビックが開催された。このように年い生れたのであるが、ゆずり希望と不安が入り雜つた時である。

〇〇歳より一歳まで(一九三七年(昭和十二年))

この年の大事件は七月七日芦溝橋で日中兩軍が衝突、日中戦争開戦、十二月三日、南京大虐殺が起り泥沼の時代に突入する。私は一九三五年(平成七年)芦溝橋に立ち寄り砲弾の跡を見るにつけ、今の世相を重ね合わせ強い気持ちに襲われた。

〇一歳より二歳まで(一九三八年(昭和十三年))

十二月に弟清純と兄としての自覚がどれ程あつたか定かたないが、母の注意が私から離れ、唐紙をそと聞き、母子の部屋と多岐にわたるを覚えている。また祖父がねんねと昔員つてくれていたが、そのはげ頭をびしりと叩いていた記憶がある。また昔員わねながら母の首の黒子をよく引く張つていて、その時の膚のぬくもりをなつかしく思う。幼児の記憶は、このようにたわいもないものであるが、何とも嬉しい。

この年の四月一日には國家總動員法が公布され、戦争の兆しをいぶかしくも高揚したが、幼児には解らなかつた。

〇二歳より三歳まで(一九三九年(昭和十四年))

この年の夏母の郷里美保関に行き祖母や従兄(半年前上二の父壽夫)さんとその姉、伯父と船に乗っている写真が残っている。世はいよいよ險悪となり、五月十三日にはノモンハン事件が起りソ連の圧倒的兵力により関東軍一個師団が壊滅している。日本軍部の不明と政治家の無策が思われる。ヨーロッパでは九月三日ドイツ軍がポーランドに侵入し第二次世界大戦が勃発している。ただ、軍事色が強くなつてはいたが、まだ少しゆとりのある世情で日曜ともなると阪神パークや甲子園の花火、山手海へのピクニックに興じた。海水浴は須磨浦公園に出かけたといふ。

〇三歳より四歳まで(一九四〇年(昭和十五年))

この頃から父はオルガンを弾いて毎日私が唱歌を歌った。また書を習い、絵を描くのを事とした。これらは昭和十九年九月頃疎開をするまで続いたが楽しいものであつた。父はピアノや絵、またてれお上手であつた。また、博物館に後世興味を持つようになり、その日は天体望遠鏡の星の観察、昆虫採集がうかつかである。モルブイ蝶やその他の蝶、甲虫類の標本が多くあり、極楽鳥の刺製、飯物標本も采しつかつた。博物館の見学もどれ程理解できたか解らぬが、潜在的印象を手えられたと思ふ。昆虫少年になつた私は近所の野池にトンボや蝶を追うた毎日の下地となつた。疎開先でも昆虫少年として採集に熱中した。だが、三つ児の魂、百までもこの例に漏れず今に続いている。書は父の先輩である山本御舟(名は憲道)氏に習つた。

この年の九月二十七日には、日独伊三國同盟が結ばれている。これより九月二日齋藤隆夫の反軍演説を以て議員除名事件があり、母がよく聞かされた。二十日には津田右右吉の記紀批評が問題になり、著書が発禁になったが、学生時代再評価がなされ、我々の必読書となつたといふ記憶に残る。特に去時の首相を知

よすがとなろう。

〇四歳より五歳（一九四一年（昭和十六年））

林洋子誕生。当歳、肺炎にて死亡。行水により風邪をひく。今のまはペニシリンの多い時代、多くの人が肺炎で命を失った。初めての女兒誕生。両親、祖父母の期待を集め、私も行水姿を絵に描いた。心は大なる衝激を受け（死を完感することになる。この頃戦時色が子供にも影響を与え、私も希望したキリスト教の幼稚園にも入水せず、お母さんやお祖母さん夢中になり、野山のきれいな植物を採集した。

この年国民学校令が發布され、東京横浜名古屋大阪京都神戸の六大都市で米穀配給通達制が発足。戦後にも及んだことは周知のこと。何より大なる衝激は山本三十二海軍司令官指揮の日本軍機動部隊がハワイ真珠湾攻撃を行い、アシア太平洋戦争が勃発したところである。世は戦勝に沸いたが、敵空母は太平洋に居て無事であつて、やがてアメリカの機動部隊の反撃が始まり、敗戦に向ふことになる。我々は何も知らず、戦勝に酔つたが、それは人の一時であつた。

〇五歳より六歳（一九四二年（昭和十七年））

茨城東の拠点シガノ丸が陥落したのが二月十五日、一方四月十八日には米軍機が、東京、神戸、名古屋を初空襲、空襲警報が流れて空襲警報のサイレンが鳴いた。この時の空襲で警告的要素が強く大した被害は無かつたが、艦載機はもうもろく、日本に大なる被害を与えた。私の脳裏にその海上攻撃機の機影が強く残つた。記憶違いかも知れぬが中国の旧式の複葉機が飛来し、民国旗の着陸員が脳裏に焼きついている。五月九日には金属回収令が出て、時計の針や鉄製品の回収が始まり、やがて家庭の硬貨や宝具、貴金属ピア線とありとあらゆる物の徴収が始まり、我が家でも宝具や硬貨（金貨、銀貨、銅貨）を出したのを覚えている。喜んでと言わない非

国民と名指された。六月五月にはミッドウェー海戦で大敗北、主力空母四隻を失い、商船を改装した擬装空母や軍艦が建造された。八月七日にはガダルカナル島へ米軍が上陸し、日本軍戦死者二万四千人を数えたが、大本営は相変わらず嘘の報道をし、撤退も報道を欺いた。外交とは国民を欺くことになり、始まるというが、今も昔も変わらないマスコミによる情報操作である。

二、室内国民学校入学から疎開まで

〇六歳より七歳（一九四三年（昭和十八年））

室内国民学校入学。三男勲誕生。九月三日。勲は生れて百日目に母の郷里島根県（現松江）美保間の母の姉ハルの所に疎開する。その家の床下を不慮、障が通過して命拾いをしてる。

室内国民学校では級長にさせられた。あまり嬉しくはなかつた。何かという責任を押し付けられた。先生は野村訓導で、頭の先けに身教師であつた。教室で長竹の棒を持ち、行儀の悪い児童を後かき打つ。また隣の席のみつこちゃんと学校に引けに後の遊びの話をしている。二人の頭を打まわせられ、怒られたことを覚えている。家は優等生を演じるが、やたら勉強させられた。好きなことと言え、父のオルガンで唱歌を歌うこと、絵や習字からである。

この年の神戸市児童美術展に弟の行水姿を絵に描き提出したのが金賞になった。習字は何を書いたか覚えていないが、銀賞をもらった。この金賞は一度学校に提出して選ばれた作品を改めて市立平野国民学校において審査員の先生の目の前で書く。書はともかく絵は写生でなく記憶で描くのである。半年を期するにあつた。大講堂で一回会して描く様子を覚えている。かくて一年生も終るのである。学年が終る度に修了証をもらつたのである。そこに書

かされてゐる先生の字が私にとって下手に見直しして父に叱られた。たわいのないことを覚えてゐる。六月は私にとって華しき年である。いふも新聞地の松竹屋で二入映画を見る。ほとんど戦争のことであらうが、内容は何も覚えてゐない。東條英機首相のおなじみの軍服姿とヒトラーの手を上げた姿がある。必ず上映の初めに益場するものである。その行方婦の道にサトラハチロめ表札懸り穿り染染してゐる。また、母の勤めていた水木国民学校はよく連れて行つてもらつたが、これは就学前のことである。「やんごとなき」かに似てゐる母の同僚の先生によく言われた。当時の皇太子(今の天皇)にである。も一つ思ひ出すのは「北野兜」の白い頸帯を長く伸ばして老人のところに弟の靖と共に母が連れて行つてくれたことである。私の興味は水晶玉や虫眼鏡やら珍奇な物を置かれていた机や戸棚であつて骨相を見られても何の及而も示さなかつたのであらう。夫人は私を覗いて平然と平伏と言つたようであつたが、弟を目して持木大物にすると宣言した。私はこれについて「やんごとなき」がして記憶に残つてゐる。当時弟は神童と言われ大人の新聞を読んで内容を語つて聞かせた。ただし漢字にはルビが振られていた。私はいつも一人の女の児と箱庭をしていて疎開して右も行き光も覚えてゐないが、別れものつらう泣いてゐる覚えてゐる。箱庭とは祖母がもつた水盤に小さな岩や鶴や橋に家畜を配して遊ぶのであつた。飽きることがなかつた。学校では一方放課後になると遊座の相手や居なくなると数人の同級生の女児と飯事をした。これは疎開するまで続いた。大学に入って、その一人と再会して驚いた。別に女の児が好きであつたわけではなくあまり体力がなくて男児のように激しい遊びが苦手であつたからである。ただ虫採りにには夢中で近の池でドンゴロホロロと言つてトンホを追いかけ、蝶に夢中になつた。

この頃空襲の恐怖はまだそれ程ではなかつたが、敵機は逼迫してゐた。三月十日の陸軍記念日に合せて決戦標語競争をして止まむが配布された。子供も意味も大して解せずチャーチル、ルーズベルトの頭

をハンマーで打ち頭から星が出てゐる絵を描き、電柱に張られた、いづれも二ミツンの海軍提督(マッカーサー)連合軍総司令官に出て来や北獄に逆送落しと等と歌わされた。

この年において、印象深かつた事件として連合艦隊司令長官の山本五十六がロンドン上空で戦死、子供心に強い衝激を受けた。四月十八日であつた。五月十九日にはアヲ島の日本守備隊が全滅、沖行の艦に兵士の絶叫が聞きたという。谷崎潤一郎の「細雪」の扉表、中島敦「弟子」、李陵が完成したことは後で知つた。あつた。この年野球用語が日本化された。ベースが塁、バントが棒、ミントが手袋の類である。

七歳より八歳(一九四四年(昭和十九年))
室内国民学校二年

級長は相変わらず、先生は女性であつたが姓名覚えてゐない。若く優しい先生。学童給食が始まる。コッペンと汁物、豚の耳が入つてゐるといふので終にはアルミの器に換えられた。出巻は祖母の作つた金糸の刺繍をして美しい袋であつた。祖母は私を溺愛し、靴下や服の着脱その他すべてやつてくれる。そのため弱女子俣になり、細く瘦せ、ヤセゴボウ(ぼう)は皮をむくと白く細見えることからかわれ、女の児とみやかされた。私は色や白く女の児と言われ、嫌がらぬ男の児だと泣くものだから余計みやかされた。そして日本男児を主張するたわい流けて黒くなるよう努めた。この状態は疎開して祖母から解放されるまで続き、日流けて黒くなる願望は久々に潜在し、結婚するまで続いた。

この年七月七日サイパン島の日本軍全滅、東條内閣総辞職、小磯内閣成立、八月四日国民総武裝令(竹槍訓練等)、八月十日学徒勤労令、女子挺身勤労令、九月十九日G.A.M.、テニスの日本軍全滅、十月十日アタカ機動部隊が沖繩攻撃、十月十九日

神風特攻隊編成、十一月十四日、B29東京初空襲、十一月七日東海大地震と大津波と続き、戦局の切迫と世情の不安が子供心にもその深刻さを植え付けた。空襲の恐怖は空襲警報報やその前に発せられる警報警報が繰り返され、B29の影が日本のヤシライトに浮かぶ姿がよく不安の上の方に、防空権を失った日本軍は何事とも出来ず、私の家の上方に、高射砲陣地でも音無しであった。この陣地には連合軍の捕虜が多く居た。そのため爆撃も受けなかった。空襲の前には偵察機が飛来し、空土の航空写真を作り、正確に目標を決定した。一週間前に偵察機が現われると必ず爆撃を受けるのである。空から豆粒などがヒラヒラと降って来ることもあり、小さな落下傘様のものも着ていたものもあった。空襲警報が鳴ると夜は泉女学校（今の夢の台高校）に避難した。恐い、恐い、夜出られるといふので子供心には面白かった。

三 疎開

この年（昭和十九年）の六月二十日、閣議で国民学校初等科児童の集団疎開を決定、縁故ある者は縁故疎開が行われた。二期は父祖の地である兵庫県宍粟郡三方村（現宍粟市）（宮町）福野に疎開。母だけが神戸に残る。勤めに対する責任感もあったが、母は福野の地を好まなかったと思える。夕方父と二人神戸を出発、戦間機の攻撃を避け、播但線を使い、長谷で下車、夜間、山を越えて、宍粟村の草木に出て、目的地の福野まで歩く、どれくらい道の未詳。三年生の身として飛しくつらい旅であった。瘦ぼった身にはつらいものであった。モシバ（今の若者か時に着ている野草をスホコ）と豚皮の編上靴が足に食い込め痛いの。山林は暗く杉や檜が林立し、藁があり野獣の鳴き声に胸を突かす思いであった。福野には弟の靖之、祖父が一足先に帰っていた。私はしばらく三方国民学校在席し湯村温泉（兵庫県美方郡温泉町湯村）新温泉町湯村。

泉へ行く。ここは八月から真湯国民学校温泉分校で温泉国民学校に置かれていた。父が分教場の主任として赴任して、私は父のところに身を置くことになった。真湯校の児童男は四年生で私一人二年生で、温泉国民学校の児童もなかった。父は「集団疎開教育記念」というアルバムを残している。過る二〇六年十一月の「毎日新聞」の「雑記帳」（三日）と「余録」（四日）に「夢十代日記」の里の旧校舍の取壊しの事が書かれていて、懐旧の念に駆られたが、この校舍は一九五七年の建築であるので、私は知らない。

私の先生は内行カホルという若くて美しい先生で、私は安らぎを得た。当時の森田助教は父の従弟の森木進三（祖母の妹のり）の息子の興三の従兄であったので、我々は大層御世話になり、近隣の村からも多くの慰問品を受けた。但馬の人達の人情深さが身に渡り、当時の学校に森田先生という若い女先生が居られたが、森田英昭店出身で、その弟の森田君は神戸大学の寮で合って感激した。宿舎は大和旅館であったと思える。四年生の同宿児童に能見君という優等生と、嵐鬼大尉の土井垣君を思い出す。児童間にいざいざも有ったが、着替する。父は自分の児童の世話で忙しく、私の事はほとんど知らなかった。父は自分も解放されたのに、羽を伸ばし、元気がなかった。

食事は大抵飯会の広間で行った。朝のお勤めの太鼓を聴いた。その食卓のおばさんの方が面白くて、何度も聞いて返し、通いんこと笑われた。まるで万歳のやまのりのもつてあったらしい。まあかと言われて、どんぞ豆か問、雷鳴をドドドドと言ったが、これをゴロメ、かか種と返した。大学の文化祭でもやってみると言わたり、どうも言葉の親子や言い廻しが地方から来ると学生の興味をいいたらしい。

風呂は湯桶（沸騰した温泉）を適度に冷した町宮のもの、

入浴料銀、特別湯二銭で私は夢平代のように奇麗で若いお姉さんに連れられて体を洗ってもらった。二年生の子供とて可愛かったのであろう。この温泉は川辺に貯湯場があって地元の人は達ばじやいもや解を感に入れて漬けて置くと見事に如て上るのて重要とされた。下の川には湯が流木込んで冬も泳ぐことが出来た。弟の靖も後に鳥取の三朝温泉に疎開する前にここに寄った。それは神戸空襲後(昭和七年三月十七日)の後(母は池田国民学校の疎開先に病身の祖母と共に赴任した。水木校から池田校に転勤してそれ程経過していないと思ふ)。町は温泉の地熱で大通りも雪が溶けて水カボカ温かかったが、雪が多くと二月に根雪が降り始め、四月まで溶けることもなく、近所のスキー場では毎自興で、近くの公園でソリを乗しんだ。あまりの深雪(夏も有らぬ)と言われた。父も通わず、神戸からの荷物も最寄りの山陰線の浜坂駅まで雪と吹雪のトンネルを歩いた。私も行きたくて、特別に頼んで歩いたが、厳しいものであった。浜坂の近くの餘部の鉄橋は最近掛け替えられると聞いたが、この大鉄橋は山陰線の運命を決するものであったが、爆破を免れた。

四 神戸空襲と日本の敗戦

八歳より九歳(一九四五年(昭和二十年) 温泉国民学校、三万国民学校、三万国民学校の前の十九年空襲警報がひびきしに併せられたが、家の前には竹槍訓練と焼夷弾を消す(消火)訓練が行われた。町の組長(下く)とガラの隣組と歌われた隣組で(一種の監視組織)が横柄な態度で命令していた。青年の先を銃剣に切り、婦人の甲高い「エイ」という声々、藁人形をぶたくのである戦国時代の農民一揆のようものであった。消火訓練もバケツの水をリレーで目標に

投げたとき、^{アキ}アキの如きもので叩くのである。今では狂気の沙汰であるが、誰も本気がそのありとなければならなかったのである。政治家の無策と軍人の不明を思わずに居られない。この狂気は敗戦まで続いた。

神戸の空襲はすでに書いたように昭和十七年四月十八日に軍艦隊帯に行われたが、制空権を失った昭和十九年六月十五日十八日に偵察機が上空に飛来し、神戸市街を隈無く写し、地図を作り明確な目標を決定した。その結果は空襲後明らかになる。山中を見隠れするどよよの空師定は、服塚を受け、私の念ずる頃にも、その残骸を見る事ができた。捕虜を囲っていた大倉山の高射砲陣地も無事であった。服塚の価値がも早無かつたと言え、まるで地上で連絡したかに見える。サートライットは浮空爆撃機のシエントロ幻想的に見えた。このような情景は繰り返され、私達の住居のあった林田区(現長田区)を含む西神戸は昭和二十年三月十七日夜度本空襲、全土空襲はつては、甲乙女勝元氏らの編むる日本空襲(全土空襲)神戸については第二巻、第十巻(参照)三省堂政治家自衛隊員公務員は銃銃まきである。一人はもとより政襲に疎開先で知る。母一人被災、多くの友人も死傷した。三月十七日の空襲は午前一時三分警報、警報一時五分、空襲警報一時五分、午前二時五分一機が神戸上空に侵入、四機の照明弾を投下、全市真昼のよう(照らす)水カボカ、七機十編隊のように投下、それ烈風にあおられ、市の西半分が火の海になったという。母のカバンにも火がついたという。道や溝に死人が木切りのように散らっていたという。母の被災は林田区は兵庫厚生のなにも多くの死傷者を出したという。私も姫路大空襲の七月三十日に疎開先の福野で焼夷弾の雨を見ている。ということはこの頃父の

郷里に帰り三方国民学校に転校しては居るが、湯村温泉に行く前ほんのしばらく通った学校である。私は後に中学校三年まで通し、高校は祖母の育った山崎で暮すのである。

神戸大空襲の後、母は池田国民学校に転校して居たという。もちろん、家と前通して疎開先の郷里に送ろうとした給てを焼失した。母の里の兄弟姉妹は母を危険にさらした父に怒りを示したが致し方なく、夫婦の心の葛藤が続いたことが子供心に感ぜられた。

空襲後、母は池田国民学校の疎開先の鳥取県三朝町に行くが、時靖と、病身の祖母を温泉療養を兼ねて同行。湯村温泉の私のところへ幽霊のようによよと来て来る。私は母を抱き付き涙も止まらなかった。母は焼け跡やう焼け焦げた湯呑を持って来たことを思い出す。母の心の傷を父はどのように和らげたか知らないが、その桶子は一統統たではなかつた。私は空襲警報のサイレンの音が疎開先においていまでも記憶に残っていてサイレンや柱時計のボンボン鳴る音に怯んだ。

父の郷里は山深く水澄み緑や花の咲き乱れる桃源境のような地であるが、神戸で毎日聴いた汽笛や汽車の走る姿あるいは町の灯がすぐ憶わしくなり、一週間に望郷の念に心を焦らす。

私をよきよく愛してくれた祖母が七月二日に七十七歳で亡くなり、後を追うように祖父が八月六日に七十九歳で他界、信仰深い祖父であったが、祖母の死後毎日行くところ泣いていたのが思い出される。子供心にも何か感して居るものがあった。祖父は死ぬ前夜父の後事を家のことを託し、翌朝酒戸を聞き守屋を掃除し、眠るよむに死んだ。二人共敗戦を知らず永眠したので何よりの慰めであったのかも知れない。村のため随分尽くらういざとく、いざさられていざらう、村のことをよきよく愛し、財産を遺したことも事実である。

日本の敗戦は忘れることが出来ぬ。昭和二十年の八月六日に広島に原爆が投下された。父の従弟の森末道人は今七十五歳であるが、投下の翌日広島入りして被爆している。私が投下の時は聞かぬもの新型爆弾の大本営の発表があったが、相変わらずゆらゆらとある。かつて桜美林大学に勤務していた時、先輩教授に金子英三氏が居られた。この方は原爆投下時、広島高師の教授であった。投下当時御真影昭和天皇の写真とを地下の奉安殿に納めるため学生と入ってうとうととしている時、投下され助ったという。地上の同僚や学生は全滅したという。神助と言うべきか、本人はこれを恥じていると常に語られた。人の運命の不思議である。奉安殿に二宮金次郎像はこの学校にあり、戦後でもそのまま置いてあったが、持て奉安殿はいの間にか消え、八月八日には連軍が満州その他に侵入し、多くの日本人がシベリヤや北朝鮮等に連行され、強制労働に従事させられ多くの死者を出した。条約等無いに等しい恥知らずな行爲である。九月には長崎に原爆投下、十四日にはポツダム宣言受諾回答、十五日終戦の詔勅を放送、ピーと報音入りの天皇の声を聞く。「朕思うに我が皇祖」と御劇奏メの詞に始まり、心が難きを思ひ、等が断片的に聞え、事の重大さが伝わってきた。この時天皇は死を覚悟して居ると思える。日本人の国民性を知るマンローサーが天皇を利用して居ることを考えたのであり、事無きを得て、日本がアメリカに隷属するようになったのが、ここが始まる。フランスやドイツが魂を売らず、己のアナチズムをもち、経済を大切にしながらも、エコノミクス、アナルと言われぬ誇りを維持しているところは見習うべきである。

三十日マッカーサー元帥が厚木に到着するが、マドロスパインをくわえている姿は不安と自信が交錯していたのであろう。以後、占領政策が推進される。

五 父の故郷での生活

私達の関心事は黒塗り教科書と代用教員である。また駐留軍の援助食糧である。黒塗り教科書は軍国主義的内容を消去することであった。代用教員は戦争で有能な教員を失った結果高等女学校出身の若い先生を教員免許無しで採用した。中等学校出身の男性の代用教員も居て、実力不足から教育は混乱した。食糧の極度の不足から私達疎開組は山の間壁をこし、田植えをし、芋や大豆を作った。私は瘦せ、ボウを返して、耕作に励んだ。しかし、山の間壁して作った芋や大豆は（鹿に）猪（一家に）食われ、猪が通過すると一個も残さず皮が捨てられていらぬのみであった。米は母の着物と交換したが、安く不公平で、足下を見られた。サウマイモの蔓を粥に混ぜて増量し、野菜作りも上手になる。粟や黍も作ったが、実は不味いものであった。山菜も今でも貴重とされるが、野菜の代用品である。弟、山川からうなぎを取って来ることもあった。

◇九歳より十歳（一九四六年（昭和二十一年））

国民学校四年

駐留軍から放出される食糧は品質の悪いドライミルク、飼料用のトウモロコシ、乾燥した大豆カス等であったが、中には米国人の善意による食品も有り、有難かった。衣類や靴文具類あるいは菓子類も有った。あるいは美しい童話類もあった。農家は今やチャンスと奮闘し、励み、食を惜しみ栄養状態悪く、かえって疎開組が体力を回復させていた。

父は帰郷後遠い村の教員をし、自転車を通っていたが、母は自転車に乗れず、教員を断念した。子供のためには神々に早く帰りたいが、両親を失った父は、その意欲を失っていた。弟達は土地に馴染んだが、私には神戸への望郷の念が消えなかつた。

た。

この年の元旦天皇の人間宣言が行われ、神から人へとなった。戦争で心身共に誇りを失った日本人は天皇の名のもとに多くの犠牲者を出した過去の誤りを反省し、天皇を平和の象徴としたことは正しい。過去の戦争を遂行した政治家や軍人の無策と不明は同時に一般人の無言の了解であった。その頂点が天皇で、天皇（神）よりあげられ存在の名の下に多くの人が赤紙一枚で戦争に狩り出され殺されたのである。今も戦争の庶民に変わらぬ。豊かさを生活をするために魂を外国に売渡す政治家や経済家に無関心で居るのである。我々の生きるべき道は武力でなく、相手を理解し、仲良くすることである。戦えれば減収する。アメリカには恩義があり仲良くするのは当然であるが日本へとしての節度が必要である。中東の独裁者が対立者を多く殺したが、正義の下に多数の中東人を殺し、自国民も多数害していることが正しいであろうか。

四月十日には戦後初の総選挙が行われ、特に婦人参政権が認められた。女性代議士三十九人が選ばれた。保守的農山村に婦人の華やかさをと高い街頭演説の姿がもたらされた。ふと焼夷弾を消し、竹槍をつき出す婦人の気合いも入れらる思い出される。十月四日には新しい日本史の授業が再開され、教科書「く」のあゆみが作られるが、私も後にこの本を見て、戦後を感じさせる新鮮さを覚えた。

◇十歳より十一歳（一九四七年（昭和二十二年））

小学校五年

この年は日本にとって記念すべき事柄が多かった。新生日本といふべき年である。しかも二七七年が丁亥であるが、この年丁亥の亥年である。三月三十一日、三訓がスタート、国民学校から小学校に移行、教育基本法、学校教育法が公布された。教育

三日には日本国憲法施行、五月二十日民法改正男女平等
 等何と今の時代に似ているのではないが、政界でも憲法改正を
 考へて自論入しているのも偶然ではなからう。また六月一日日本
 初の社会主義内閣が成立している。今の政権党は何と乱味悲
 いことであらうか。

私達子供を熱狂させた事件と言へば八月九日「古橋慶之達
 が自由形で世界新を出し「日本の飛魚」と林韻された。クロ
 ールという泳法が子供達にも大人気になる。
 十二歳より十二歳まで（一九四八年・昭和二十三年）
 小学校六年

農村での生活も四年目に至る。神戸を思つて気が持たは止むことはな
 く「高峯山」に登ると海が見えると言われると登つて見たことも
 あるが、霞の懸つた山の重りが展望するものがあった。一方父はバレー
 社外の色とりどりの草花を植えていたので、心をこむことがあった。
 父の勤教先も下ニ方中学になり、やつと家庭が落ち着いて来た。
 思つて父は西谷村・山崎町等当時の交通事情からすれば遠隔
 の地に職を得て、先事教師との関係に苦勞しだらしく、夕コ
 や酒を運して母を困らせていた。いつも酔い潰れた父の介抱に常に
 私がついて父が西谷小学校に勤めていた頃、兎を二羽あつて
 来てくれたことがある。兎小屋は木製家のりんご畑に金網の戸を着
 けたもので、父と私と弟達の手で作つた。兎が来た日は嬉しくて、バツ
 して殺してを賞としていた。兎は迷惑したところと思つて、この頃にな
 ると番いばしり、今流行のパンダ兎等種類を増やして行つた。弟
 の傭はわざを使つて小鳥や山兎を捕獲するのが上手であつた。中
 でも山兎は小屋に飼つて見たが、日夜の晩に小屋の木を食い破り
 飛げた。兎が月夜に異常な力（本当は木を食い破るくらい、山兎に
 とつて何でもない）を發揮するのは月の引力が尤もに關係がある
 のだらう。飼兎は地中海へ兎で山兎と種類が違い野山を飛ぶこ

とはない。山下兎を追うと斜面を数十メートル飛ぶ。一方飼兎
 は畠や牧草地に住んでいて、ピーターラビットはこれをモデルとする。
 私はこの頃野球に夢中であつた。「野球少年」という雑誌を買
 つてもらつて毎日熱中した。バットは棒切れから買格してせらしい
 形をしたものを買つてもらつた。グラブは布製のもの、一般であつたが、
 私はゴム製の使用していた。ボールは石を芯にして布を巻いて作った手製
 のものからゴム製の健康ボールを用いたのによは好まな運動では
 なかったが、質品の餅や小使銭が目的であつた。体力も村の仲間
 に負けをくむし強くなつていた。これは物の無心、親が栄養摂取
 に努めてくれたからである。

この年五月一日美空ひばりがデビューした。私はクラシック音楽が
 好きでほとんど興味をなかつたが子供達間では人気があり、「美空
 ひばり」という少女歌手が居るげや」という会話を、登校の途中に耳
 にした。私より一歳下の少女歌手であつた。人気歌手の位置を父の
 「東京フキヤギ」等と小洒落な姿で歌を歌がレコードのラビ
 トに描かれていた。ラジオは有つたがテレビはなく、時に映画や映
 像を見る程度であつた。

六月二十日の福井大地震で死者三九〇人の被害を出したことは
 戦災と違つて恐怖をあおつた。十一月十二日の東京裁判で
 戦争、神のような存在であつた東條英機を初めとするA級戦
 犯容疑者二十一人の有罪判決が下され子供ながら戦争中の恐
 怖を思い出した。三國同盟における独裁者であるイタリヤのムッ
 ソリーニ、ドイツのヒトラーの二人は死して敗戦を迎えるが、日本の
 場合生きて裁きを受けることになる。私達に政治的な事柄は
 ことなく、左右の思想に關係なく、戦争経験者として平和を
 希求するのみである。つくづく思つて、人は動物、動物本能を遺伝
 子として持つて、この本能を動物は制御する能力がある程

度持てゐる。尤は争うが相手が死ぬまでは戦わない。尾を垂らして負けを示す。人は教育によって子供時代からそれを押さえる。しかし、動物の子供のするように闘争の訓練をし、その加減を知らしめないと、本當の闘争の時手加減の仕方解らず相手を死に至らしめる。今、世界や日本において人の命を軽んずる事件が多発するが、動物に学ぶべきものがある。少小による殺人、自殺、親の子殺害、日本民族における厄機は自然のエネルギー生滅の法則からすれば日本民族のエネルギーは衰滅の方向線を描いてると考えるべきであり、法令の美辞令句では根本的に再び充実したエネルギーの向上は望めないであらう。人類を生かすも殺すも、人類の叡知を發揮すべきである。人を殺す武器(これは一般に動物は身につけては武器とし持たない)を、人類とは決定的に違ひである)を押さえ、人を生かす道具を作り、人と自然が共存する方法を生み出さないう限り、盛者必衰の理の通り滅亡の速度を加えることになる。平和を希求することは思惟相世や政治だけではどうにもならず、庶民感情とヘルで達成しなければならぬ。ローマは一日にして成らずといふが成つた時は崩解は始まる。その速度は速い。今の大国も程度の差があれば必ず崩解する。それが今問題になつてゐる原子力という力がその引も金になるかも知れない。その時は(国のみならず)人類を亡すであらう。自然の浄化作用が必ず起る。人類は動物の一員であることを忘れ、時に人類は地球の鬼ツ子となるからである。

◇ 三方中学における三年間
 ◇ 十二歳より十三歳まで(一九四九年(昭和二十四年))
 中学入学

五月三日待望の妹富子誕生。憲法記念日にちなんでの命名。この地で生れたのも初めて、平和の時代に相応しい名である。彌彌子と命名したかららしいが、人名漢字に無くこちらに決定。未明に生れたが、父白山崎小学校の教頭で、単身赴任中、弟と二人で三方

町に産婆さん(今の助産婦)を呼びに行く峠の道に近いのであるが、向いの果道を通す行くと、途中、三方大橋上で犬を連れながら巡り歩いた間、いかつられる。走つて目的地に着き、産婆さんと迎え無事出産。妹が出来て大層喜ぶ。子守は婿と共に、風呂も私達が入れる。風呂は立前門風呂で、鉄製であつたので、板を流めて入るは掛けてあつて、薪で湯を沸かした。風呂の天井を父は美しいガラス玉や器で飾つた。

この頃野球熱が盛んで、野球部の三番手の投手になつた。打つのも可成得意であつたが、父が受験勉強に支障があると退部させられた。当時父は私の中学の校長になり、子供心に最大のプレッシャーを受けた。陸上競技は続け、短距離をや。また、部内では相撲が盛んで、板技として選手になつた。その選抜方法は体育の時間に勝ち抜き勝負で選ばれる。相撲は板技であつたので、父も校長である。手前退部はさせなかつた。あまり好きでもない相撲を三年間続けることになつた。その得意技は短距離のスタートのどろろを生かした突き、カバ折り、土俵際のねばり腰による投げ等であつた。大きな相手を一気に上手投げにするのも得意であつた。毎日暗くなるまで練習し、冬は焚火を火として練習した。大食漢になつたが、腹割が着るだけで、あんこ型にはならなかつた。ウチキロの米俵をかついで歩くとあつた。今米俵を持つてみると、かごとあつない。祭りに各部落の神社を巡回した。夜になると眠くなり勉強どころでない。それでも高校に入らなくて口をならす。受験参考書を買つてもらひ、自学自習をした。マイペースで、いとうまく行かず、一人で勉強した。人に教わるの口今も苦手である。

一月三日理論物理学者の湯川秀樹博士が初のノーベル賞を受賞し、私は学者を憧れた。まだ、映画『五右衛門山姥』が大ヒット。石坂洋次郎の作品が大流行した。藤山一郎の歌う主題歌があらまや聞えた。藤山一郎は音大出身で、エリート流行歌手であつた。

十三歳より十四歳まで一九二〇年(昭和五年)

中学二年

相撲は相変わらず続けたが、この年から駄伝説技の代表選手となり三年生まで郡の大会に出場すべきならぬ程度で走った。適当な選手が買えなかつたからである。通学も高足駄(びだ)や東草履である。湯村温泉の冬の朝会に雪の中も裸足でいても平気であつたと思ひ出した。疎開生活ですっかり忍耐強くなり運動にまよつたは強くなつた。

この年から三年生までは従合会長と勤めた父の前で号令台に立つことは極めて苦痛であつた。選挙で選ばれるのだから仕方ない。弁論大会の郡大会に出たがあまり練習をせず、原稿もなく特別のフリもつてやつた。やたら横文字を使うことが流行した。

学芸会には小学校以来劇に出ていたが一番印象に残っているのはシラスピアの「ヴェニスの人」をやつた時、私はアントニオ役で誰の脚本か覚えていないが「オ、ポーンヤ」と言つてポーンヤの手を取つた時で観客席から木だ早いと野次が飛んだ時である。相手役の名も忘られてしまつたが、突にたわいのないものである。練習中母は師範学校で英語劇「金の芥」を演じた時の英語のセリフをよく覚えていて話して聴かせて貰ふが今は覚えていない。学芸会に歌唄することもあるが、私はこれを最も得意とした。三年ローライの練習中、愛多類になり、良い指導者もなかつた父は私に音楽の指導をする情熱を失つていたのである(一時自信を喪失した)。それでも父は学校のグラウンドピアノで師範学校時代の音楽会を演奏したワイマンの「銀波」をなつかしく練習していた。絵や書道はこの頃も父子共に描いていた。書は一時疎闊してしまつた。絵や書道時代の先輩の山本御善氏に習つた。幼児の時と疎開時の一時と大学時代の一時に習つたことになり不出議な縁である。

世情はまた不安定で、六月二十五日に朝鮮戦手が勃発したり、

七月八日には警察予備隊が新設されたので、競争が再びかたむかへた。今こそ何でもないが、伊藤整武の四ヶヶイッ夫人の赤心し、が榮華になり、一わらせつか芸術が、論争が起つたが、私はそれ程衝激を受けらるまでには成長してゐなかつた。

十四歳から十五歳まで一九二一年(昭和六年)

中学三年

受験準備。修学旅行は前年に京都方面に行つたので、今年にはあまり気が進まなかつたが相撲と駄伝説が続けた。インドのネール首相の提唱による初のアジア競技大会が音留、テニスが開催され、少年に刺激を与えた。無着成泰編に在る四山女学校により、我々より寒村があることを知り、人の心の暖かさを知る。四月二十日(バートルマン大統領との衝突より)マカーサーが解任され、元兵は死をすた、消え去るのみ、の名言を残す。退任する私がこの心境に在るかどうか、マカーサーはやつて日本人の精神年齢は十三歳(未成年)と称した。自分を物と考えることが出来ぬと当時の日本人の精神構造を指摘した。九月八日に対日講和条約が結ばれ、日米密保条約が締結され、日本も国際社会の一員になつたことを自覚し始める。

六 泉立山崎高等学校下の三年間

十五歳より十八歳まで一九二二年(昭和七年)から一九二四年(昭

和二十九年)まで、以下世情についてはほとんど大切なきを以て省略する。父が父の下を離れ祖母の地である山崎町に来る。祖母の生家である家の一室を借りて自炊を始める。この家には祖母の妹すゑの夫前野佐吉の姉一家の上下さんが住んでいて世話になる。親元を離れて不安と解放感、初めの自炊で可成若しむ、道所に住む前野家には世話になる。金銭の使い方も解らず

栄養失調のような状態になる。朝コンロに炭を起し、食事を作り学校に運ぶの付つらい。

高校に入学したその日実カテストがあり、英、数、国三科目の成績によりクラス分けがされた。進学組約二十人の上位二十人が揚示され、私は英語のクベストに入ら。三年間、毎学期テストがあり、組繰えがなされた。私は三年間落ちることに無かったが、受験勉強は自炊しながらで辛いものであった。三年生の時、弟の靖が来て共同生活をする。私は親の生活を知らないので、弟の要求はしなかったが、靖は遠慮せず親に要求したので、生活が改善され期がった。しかし、早朝の補習は自炊生活を、身に負担で、自分で受験勉強をした。自由で野家の栽培も、ぼろ焼、英語の中では古文と漢文の比率が高く、現代文は自ら論文と言われた。数学や英語の授業は期待せず、も。自ら受験参考書を買った。漢文の中は、論語が面白かった。短い文が一つの哲学でもある。母によく論語を語つてくれた。子曰く……と、数学は難題を解いておいて、これをいろいろ質問して先生を困らせた。英語は耳聾の先生はともかく、戦中に学生だった教師は教育を受けていたので、発音も悪く、その他授業は音楽は選択であったが、科目というところでも、良い声の先生が居て楽しかった。体育は下士官上りの教師で軍隊調で何かというと全体責任を問われ、戦中の暗い影を見た。

私は陸上競技部に入っていたが、受験するまでは退部せよと言われ、親を呼びつけてまで圧力をかけられた。退部しなかった。国史受験組では私一人が入部していた。

服装についてはも厳しく制服であったが、マフラーやオーバーコート、靴も禁止であった。頭髮は丸坊主が要求され、三年生になっても一部解禁になった。制服は木綿地で母が作ってくれた。破れると自

ら繕った。高校生活も何とか終えることになる。

七 大学受験から教育学部専攻科の六年間

十八歳より二十歳まで(教育学部) 一九五五年(昭和三十年)一九五九年(昭和三十四年)

二十歳より二十四歳まで(専攻科) 一九五九年(昭和三十四年)一九六三年(昭和三十五年)

受験は外部の模擬テストを受けたり、「雲霧時代」や「浮城」と言つた受験参考書を参考にした。私は生まれ故郷の神戸大学を希望して、教育学部を選んだが希望もあつたが、浪人は認められず失敗したら「下橋」と言われ、とりあえず入れれば良いと思ひ決定した。入試発表の日友人に見て来るように依頼し、私は「奪われた七人の花嫁」という映画を見た。依頼した友人は不幸にして落着いてしまった。二期校は大阪大学であったが、すでに結果が解っていたので途中で止めた。もちろん丁稚のことには父の本気で付まかつた。受験費三百円、入学金三百円、住吉寮費三食付三十円であつた。授業料年額十円である。教育奨学金は月額千五百円であつた。家庭教師週二回(一、三、五)日であった。入学後、寮の先輩が福原の遊園の前を歩かせた。大人になつた証のふたつという。幼頃の頃親に内証で歩いたことがあつたが美しいお姉さんが居たことを思い出さす。授業の選択も先輩が決めてくれた。読春禁止法は(一九六八年)昭和三十三年四月日施行。授業に興味を持てたのが音楽と書道である。文学は楠道隆教授の「枕草子」や近代文学、漢文学は四書五経の中の論語の朱注の徹底した訓話注釈である。楠教授はゼミの指導教授であつた。漢文は東京高師出身の先生であつた。書道は鈴木翠軒流の木村翠龍名(邦夫)助教授で戦後に

琴東聖空氏らと書道普及を努めた方である。私は翠峯という号をもつた。書は一方で山本柳舟氏に在学中一時習った。木村先生の教育方針は学生自ら法帖を選ば七才合格するに単位あることなる。私は最初楷書は「孟法師碑」、仮名は「関戸本古今集」から始め、納得出来るまで臨書し、仮名は書いたものを手本に模せ、うまく重なるまで行つた。書の同好の学生と書道部も作つた。書道科の中学校一級、高等学校一級普通免許状を授けられた。この年は二人取得したと思ふ。木村先生の教育方針以後の私の教育方針や研究に大なる影響を与へ、学生も自らに自発的創作的な方法で学習や研究をする態度を生んだ。

音楽は音楽科の望月先生にヴァイオリンを習ひ、試験に及ぶの齋藤祐若(音楽科)に伴奏をしても、音楽科の先生達の前で演奏した。神戸大学交響楽団にも入部。演目はベートーヴェンの「運命」、モーツァルトの「白鳥の湖」に定着て「ハンガリー舞曲」(コッパア)、「私の最後に演奏したのは「フィンランド」であつた。富山は演奏旅行に出かけた。音楽科の卒業演奏会に「モーツァルトのピアノ協奏曲」を弾いたりした。三浦大(神戸大)阪市立一橋の合同演奏会を会場回り持ちで行つてゐた。男性のコンスタクリークチーム一時歌つてゐた。校舎の中庭で自由曲のコンサートもあつた。

学校のクラブは書道部、園芸部も作つたが省略して述べない。ゼミの楠先生は「枕草子」の本文研究一助であつた。ピクニックに行つても雑誌論文を読んでおられた。情の濃やかさの方であつた。夙川のお宅に卒業後にもよく訪ねた。私はいつも師とは別の研究もしたが、学問の方法は継承してゐるものがある。卒業論文は「当用漢字の歴史」について書いた。入学する時のあまり発達まじな教育学部であつたが、まい師は思ふまい、ない教養を身に付けることが出来、後の研究に潤いを与えられた。今博物学的研究をしてゐる基礎は父の幼児の時の指導と教育学部の教育に負う。

寮生活のことについても少く書いておきた。住吉寮は教育学部の前身の一つ御影師範学校時代のものが、校舎もそれを受け継いでいる。校舎の上へ階段を登つたとらにあり、職員宿舎もあつた。校舎の横の湿地には食虫植物の「毛氈苔」も生息し、寮の横のふすまには山兔、時に猪も遊びに来た。公園になつてゐたが、麓には自鷗美術館があり、近隣には谷崎潤一郎の「細雪」の舞台となつた住吉川もあり、作中人物にもよく気分が散策した。寮の背には「甲山」下界には「又の海」瀬戸内海の一部が展望した。また実験農場もあり、その技術は「バラの接木」や「シラメンの育苗」川崎汽機王の邸宅を見学させてもらひ、菊作り専門の庭師の話を聞いた。寮の生活であるが、海の見えろ七号室で「十畳程の部屋に三人程が居て、どういふわけが吾人(スチムン)と言つた」の話をよく聴かされた。坂馬の歌も出て、私は洋画専門でオドリ(ハバ)の「口舌の休日」とか「エアバスター」の「愛情の成る木」とか夢中になつて、キャサリン(「パイナップル」)はもとより西部劇の「シラン」の「驛馬車」等話題に事欠かず、朝日会館やもつと安いところに通つた。外国旅行の出来ない当時の唯一の楽しみであつた。音楽会の話題もよく出た。カラヤンの安らぎを買入るため始発電車「ライカ」に通つたり、上野のロストロフボロヂナヤカサド、ヴァイオリンのシオニード、ゴッダヤオイストラフ父子等の演奏は夢中であつた。寮には電音があつて、私の少年時代にあつた大型の電音には及ばざ悪つたが、中古のSPの「ライカ」や「十九世紀風のウグ」は毎日、演奏会を楽しんだ。また「コッパ」として各部屋で毎日集会に興じて、酒や肴は売店で買ひ、飯は農家出身者が毎日提供し、私は炊飯係もやつた。ライスキリーを初めて飲んだもの、頭で、サントリーのそれに砂糖をたぎり入れて飲んだが、実に美味なやつた。

食堂と風呂は一律に混浴だ。飯の中に鼠の糞が混つたりしたが、旺盛な食欲はそれと物とせず、取除いて食した。夜はある時間か

過ぎると人の分も食うことが出来ず、食事の時間が来ると従者が鐘を鳴らす。この時の鐘を鳴らすのは、鐘を鳴らすことには威嚇を覚えると言っていた。当時の競馬は出走に鐘を鳴らした。食事の魚は臭かった。安いものを仕入れられたが、腹痛を起す者はいなくなった。飯は二度が入っていたが、町の安全食堂も同じであった。後、食糧事情が長く足りず、銀メシ(白米)が出るようになった。

私は専攻科も合わせて康生活六年で、武的存在であった。部屋には本が増え、他人の場所も占領した。専攻科二年の九月、岩波書典体系の大鏡の配本の毎日、タビコの不始末から私達の機が全焼し、大切にしていた、タビコ、パンパチ製のスライオン、カール、フー、を失い、本も多数焼失したが、先火者は知らぬ顔をし、何の保障も無かった。他にも、米屋の先輩に貸した布風とタビコの不始末で焼かれたことがある。全焼した時、ボロボロ本の焼け残り、がダンボール一杯あり、驚いたが、それを見れば友人の母が赤面したという。

本と言え、大阪の中尾松泉堂、京都の手町の古書肆、神戸三宮の後藤書店等、古書を購入した。

◇専攻科の二年間

母曰く、大学を卒業するに当り、勉強が足りなく後悔をいかにと言つて進学を奨めた。私も納得して進学を決定した。文学をやろうと思つたが、文学部には大学院がなく、その前提となる専攻科があったので、これに入ることにした。同じく入学して嘉部最隆君二人の学生であった。嘉部君は森鴎外の研究家で、大阪樟蔭女子大学の教授になった。中世文学の永積安明、近代文学の猪野謙二、国語学の島田勇雄教授と教養課程に平安文学の野中春水、国語学の島田謙二助教授による教授陣であった。私は永積、島田両教授と助手の森井君と嘉部君と私で保元平石物語の演習を行った。猪野先生は、秋石の演習をやめて、私は二十夜を担当したが、何をしてもいい解らなかつた。二年目には嘉部君は大阪大学の犬

学院で専攻一人になった。猪野先生は名文を書かれたが、授業中のことには難解であった。書道の免許は高校二年であったが、国語は一級になった。中国文学は山口先生に習った。

修了の論文は「心」源氏物語について書いてみたが、全く不満であった。かくて二年間の専攻科生活は終るが、東京へ来てから永積、島田両先生と交流があった。永積先生は退官後、清泉女子大学へ来られ、逗子市の山の根に住まれ訪問したり、漢文についての質問を水飯、れる直前までいただいた。島田先生は奥蔵が私の結婚の世話をして下さり、仲人もしてもらった。恩義を感じている。

永積先生は学生の話をよく聞いて下さった。院生の頃は法政大学のライオンズの代議と何度かした。島田先生は国語学者らしく、謹厳であった。

八 東京都立大学大学院の五年間

◇二十四歳より二十六歳まで(修士課程)一九六二年(昭和三十三年)

一九六三年(昭和三十三年) 修士課程修了

◇二十六歳より三十歳まで(博士課程)一九六三年(昭和三十八年)一九六六年(昭和四十一年) 博士課程満期退学

二十四歳の四月一日、東京都立大学大学院人文科学研究科修士課程(国文学専攻)入学。これに充立つて住居を決定し、引かれなならない。未知の地に困っていた時、父の従弟、森末新(祖母はの妹の長男)さんを訪ねたところ、丁度江戸後期の産科医片倉鶴庵の伝記を書いていた時で、助手をするように言われ、同居するようになった。新さんは有能な耳鼻科医で、小田原の駅前の栄町に開業していた。芸術家肌であった。私は病室の一部屋を与えられ、ここから東海道線が横浜に出て、東横線にて都立大学で下車し、柿の木坂を登って大学院に通った。森末家には

長男の達、長女の雅子さんを筆頭に三男二女と新誠子夫妻の四人家族にフィックスステリア二匹であった。新さんの母は湯本の別荘に一人暮りであった。短期間であったが、大層世話になった。次いで網島のアパートを借りることにした。ここは私の従弟の松本保祐母の弟輝夫の長男が慶応義塾大学の学生であった。この一室を紹介してくれた。都立大学に通うに便利であった。大曾根町というも水田であった所を埋め立てた地で溝にガリガリ居る。庭には冷泉が湧き出た。大倉山の梅園は散歩道であった。近にナチュル通信機工業が新じま出来たが、社員が退社後、英友人の技術文献を読んでいるのが感心した。その後弟の勤が受取浪人をするため、高田馬場の面影橋に部屋を借り同居した。ここも短期間に終り、弟は下井草にアパートを借り、私は高田馬場の圓鉄の近くの諏訪町にアパートを借り、大学院を修了するまで、後、結婚するまで、ここで暮らす。

大学院の指導教授は西尾光雄先生、数人の院生が研究室をお茶を入れてもらい、お茶の授業教材は『枕草子』、絵巻引は田中重太郎の『校本枕草子』に付されていたが特に当番の時は、金巻の目を通して出席した。ある時『つづみ』(阿久)という話についてどう思うかと先生が突然質問されたことがある。我々は何書物的な返事をしたところ、先生は納得されず、参考書を見たりして回答を試みたが、ことごとく不合格、何週か黙りの後、我々の不勉強をたしなめられた後、佐伯梅友氏の『みちのくはいつくはあれど』(はがまの溜溜とく船の綱手悲しむ)とどう論文を読んだか確がめられたのである。私はこの時不明を恥入り、この歌を今も忘れずい。『古今余集』巻十の束歌を初め、歌論書や謡曲、樂の綱道、等多数の書物に引かれていた。西尾先生はよく謎めいた質問をされたが、実に核心を衝いていた。

授業が終わると人との交際の仕方を教えるための歌舞伎町の飲

み屋に連れて行って下さった。今のよういビルが林立するまでなく、平屋が軒を列ねていた。今もその店はあるらしいがビルの中にある。文人作家や学者が集まる店、後に研究会や大妻女子大で世話になる濱田義一郎先生にもよくお目にかかった。先生達に学生を紹介し就職できる手段を作って下さったのである。多くの学生は先生の仕事によりその臨断度を測り途中や退散したが、私は最後まで同行した。はじめてさされることも多かつた。やのため、ポーナス(はくと)と飲女屋の付けに消えたという。西尾夫人は『大日本国語辞典』(富山房)の著者松井蘭治の令嬢で、先生のことよく理解して耐えて居られたと、我々としても感謝の心で一ぱいである。先生宅を正月等に訪うと料理を準備して酒もて馳走を下さった。ある時、結婚してから実家に帰してあらわなかつた。漏されたことがある。今の人には理解されないであろうが、家を出たものは嫁ぎ先こそ我が家であることを大切にしたのである。

一九六一年(昭和三十六年)二学期より上野公園高等学校非常勤講師(この年のみ)

④ 同年五月 研究発表「なまめかし考」(東京都立大学国語学研究会)『源氏物語』中の語義について話す。

一九六二年(昭和三十七年)四月 京華中学校、高等学校非常勤講師

② 同年六月 研究発表「王頼文学の死について」(日本文学協会 古代部会)『源氏物語』を中心に述べる。

③ 同年「源氏物語の引歌」都大論究二号(東京都立大学 国語国文学会)『河海抄』等を参考資料に『源氏物語』の引歌を認定。修士論文の同題に発展させる。

京華学園は商業中高女子甲女子高から成る。創立者の息磯江理事長の女婿が神戸大学の思師猪野謙二先生で、就職に当り推薦いただいた。また大学院と神戸大学の先輩向井若樹氏

が京華高校に勤めていたが、大学院を修了する時勤めを辞めるとになり、私を推薦してくれたいのである。この学園には、成城大学国文学科の先達高田瑞穂教授が在職されていた。私の勤め初めには、伊藤博士之教授が、高校教授としておられて、私は大層世話になった。伊藤夫人も商業高校に居られた。中学の教頭は金丸亨氏で、若い時宝塚少女歌劇の大ファンであったという。当時、宝塚は男性の見るものであった。私は宝塚劇場でカサヤのペルシニールを聴いたくらいである。

伊藤博士之氏の推薦で、園外文学会という読書会に加わった。鍋井孝、山田俊雄、大島建彦、小山弘志等諸先生が居られ本の読み方を学んだ。園外文学は源氏物語とか万葉集、著知名度の高い作品に對してあまり知名度は高くはないが、魅力のある作品を指す。私の学位論文の對象になった。河玉造小町辻表書もこの時読んだ。寛永板本や稱書類従本をテキストにした。また少し遅れて、つぐげ会も作られ、濱田義一郎教授を中心に私も同年配で、渡邊守邦氏が居て、珍しい俳諧系統の書の類編集。や近世の散文類も読んだ。

① 一九六三年（昭和三十八年）四月一日 京華女子高校教授諭

男子高校は不同と女子高に移る。初めての女子のみの学校で、初授業の時生徒の顔の区別がつかぬ程緊張した。校長は富田祐氏で、若い時宝塚ファンでシネマファンであった。同僚に共立女子大の教授に居られた竹内美智子氏や日本女子大の後藤祥子氏が居て、共に谷崎潤一郎訳の『源氏物語』の下訳を作っておられた。後藤氏は平安文学の研究者として名実があり、教授を兼ねて学長をしている。女子中学で樋口一葉の作品を読んでもおられた。私は古典一般を担当した。卒業式には卒業證書の氏名を書いた。藤上競技部を生徒の依頼により、長野の小海にあげ、学校の施設で合宿訓練を夏休には行った。イターハイに入賞した生

徒も居た。私も一緒に走った。

正目には九夕会も作法室で行った。学園の組合の書記長さまにせられた。私は組合室でテノロを持ち込んで練習した。通勤は片倉自轉車の山岸兵藏氏（社長の息）に依頼して、クロムソリアン製のロードレーサーを作ってもらい、通勤や小旅行にも使った。箱根の女峠に登ったり、生徒達（男女）と鎌倉や狭山湖にピクニックをしたこともある。これを諏訪町のアパートに置き、自炊し、弁当にカマドウチを作り、朝はモヤシヤハムの切り端等を用い、うどん等を混ぜて炒め物をした。かくて大学院博士課程が終るまで女子高で通った。

④ 同年（昭和三十八年）九月 紹介「西尾光雄著『文体論』日本文学（日本文学協会）鳩書房から出版された。

⑤ 同年十二月 同題 都大論究三号（東京都立大学園語園文学会）

⑥ 一九六四年（昭和三十九年）十一月 日本文学に現れた東方類中国十号（中国の会）日本文学に影響を与えた東方類中国十号について「史記」の東方類伝を底に私漢比較文

類という人物について「史記」の東方類伝を底に私漢比較文の立場で書く。中国は、竹内好氏主権の雜誌。

⑦ 一九六五年（昭和四十年）六月 日「中国諸語人物伝」文芸四季二号（文芸四季の会）諸語という語を中国古典に求めて論じたもの。勁草書房の田辺貞夫氏刊「書物の編集

者を中心とした同人誌。東京堂等書店で市販。

修士論文は『源氏物語の引歌研究』、『河海抄』等の古注を契機に引歌の研究を行。

九 結婚と格美林学園時代

① 二歳より四歳まで 一九六六年（昭和四十一年）四月（百）一九七七年（昭和五十二年）三月三十一日

四年勤めた京華学園も大学院満期退学と共に退職、昭和四年四月一日より裕美林学園に勤める。こちらに転職する切っ掛けは京華女子高校の生徒を裕美林大学文学部中国語中国文学科の推薦入試を受けさせるため、学長の清水安三氏に会いに行つた時である。安三氏の息子である清水三氏(当時共同通信の記者であった)が後学園に入られる。この清水三氏の夫人は私の妻の姉の天と兄妹である。二此安三氏に対する紹介状もいろいろ生徒を同伴してつたのである。私はこの段階で裕美林学園に移ることは考へていなかったが、安三氏の特殊な個性と見事な話術に意気投合して、大学は急に片断がないうがしばらく高校ではどうかと言われ就任に同意し、教頭に紹介された。給料は公立学校並みと言われた。心のゆとり不安を覚え胸騒ぎがしたが、乗りかゝつた船と決心した。京華女子高校と比較してあまりにも素朴で校長も村夫子然としていた。若い教員はなかなか良かったが、京華学園のように自由の風もなく、学問の香りも稀薄で、いよいよ不安を募らせた。まゝまゝそれで良い所を擇ぶよう決心した。職員室で隙を伺すると、まゝでも論文を書いたり文章を作っていると告げる同僚が居た。こゝには永く居られないと思つた。それで生徒は素朴で良く安らぎを得、同僚とも少しづつ気持ちも通じ合ふようになった。学校で(学問を)忘れ、休養と精神の安定に努め、休日や夜に外の研究会に出で、自宅で論文を書いた。給料は京華学園に比して半分であった。大学でも似たもので、組合運動により退職後やつと世間並となつた。クオンチヤンスタイルでもあり、建設途上とはなかつた。

結婚 (一九五五年) 昭和四年(月)六月五日七日入籍

同年十一月「滑稽の流れ」 日本文学十(二)合併号(日本

下宿していた小竹森繁氏の紹介による。仲人は四世師の島田勇雄先生夫妻、式等の事務的一切は林澤常次郎コウ夫妻がとり行つてくれた。会場は無一文が親に迷惑かたつまいと考へ、今の東京ザグザグパレスの前身の湯島公会館に青山学園の牧師を招き、同式してもらい、歌手を招き歌ってもらつた。披露宴もこゝで行つた。豊かな家庭に育つた妻が貧乏の私に不安を抱いてはと思つ、後帝國ホテルに宿泊した。雨のせいで降る夜であった。新婚旅行は京都、奈良、比叡山、琵琶湖等を巡つたが、貯金にはほとんどなく不安であった。母が三十万円とせうと渡してくれ、天にも昇る思ひであった。この三十万円を資金に何とか新家庭が出来た。母には不忠識な力があり、金銭に困っていると送金してくれた。思ひ出さず涙が出た。母の愛はかくも強い。私達新居は横浜市港区の篠原にある安アパートで横浜線の線路際であった。内風呂は約一ヶ月続き、貧乏を見兼ねた妻の父が、津島の麻布の家に来るよう招いてくれた。妻の母はすでに他界していた。お手伝いさんか一人か二人居て家の雑事をしてくれた。生活の安定を得られ、息苦しかった。

この年中国で文化革命が六月に勃発し、一九七二年まで続いた。当然日本にも影響を与え、学生運動の引き金となつた。

- ② 同年五月日「東方朝伝」文芸四季三三号(「文芸四季」の会)
- ③ 同年十一月「唐物語の文体」文体論研究九号(日本文体論協会)中世の翻案物語である「唐物語」を中国文学専攻の学生に教えるための研究
- ④ 同年十一月十九日 研究発表「出典論から見た説話の文体」
- ⑤ 今昔「唐物語を中心にして」(日本文体論協会)
- ⑥ 同年十月「滑稽の流れ」 日本文学十(二)合併号(日本

いのが、遊んでばかりで学生でいる必要があるのかと問いかげると、学生であれば公認で遊べるとも思わぬにはびっこりした。これらに例外かも知れぬが、学生気質の一面を言いつけて、いろいろに思える。私達戦中戦後の貧困な時代に育つた学生は親の苦勞を知っているので遊ぶのも悪いが勉強しなければ親に申し渡りがないという気持ちと心の隔りを持っている。ただし、奨学金を受け取るとその目の中にダラスホルで書込んである学生もいた。当時の教育奨学金は月額千五百円であったことはよく知られた。話を本に戻すと、法政大学の新生入生の中で全共闘の学生が闘士に成長する姿を見ることが出来た。薄着きない姿の男が中庭の台に登ってほとんど高意味の解らぬ言葉で大多を登って肩動する姿は戦中の軍人や若者の姿と重って不気味であった。

この年の一月十八日に東大の安田講堂を占拠して不気味であった。この年の一月十八日に東大の安田講堂を占拠して不気味であった。事件は排除する機動隊が乱入し封鎖解除されたことけ大きな事件であった。時の東京大学の総長は前学園長の加藤氏であった。私達家族は町田から高田馬場住宅に越して来ていたが、格美林高校から早稲田大学に進学していた学生が夜警警備に追われていてとって逃げ込んであるものもいた。私によく娘を乳母車に乗せて目白界隈を散歩したが、そのコースに学習院、田中角平御殿の前を通り日本女子大学まで足を任せて歩くことがあった。学習院は私にも娘にも気に入りのコースであったが、そのうち紛争が激化し、入場を断られるようになった。学習院の学生の服装もいろいろのものになった。感じられるようになる。

法政大学の紛争は激しくなるとは言われて、来年より専任にしてもらう約束が最後の承認の教授会が開かれず、心配になり、格美林大学の石川忠久教授に頼んで格美林大学に招いていただくことになる。地獄に仏の心境であった。

この年(昭和四五年)の十一月二十五日、吉川弘文館から「古事類聚」の刊行が始まった。この書は類書の一種で、私にとって宝物的価値があった。予約特価七千円前後、全五十冊で購入するに決めた。また「古今圖書集成」一万巻が全百冊で台湾の文星書局から出ていて、二十万円で売っていたが、これを海風書店に頼み込んで何冊かに分割して購入した。当時生活は楽ではなかったが、妻が自分のものに何も買わず家計三面にして買ってしまった。以後類書の研究に拍車を掛けることになる。

◇格美林大学文学部中国語中国文学科

三十三歳より四十歳まで(一九七〇年(昭和四五年)四月一日) 一九七七年(昭和五二年)三月三十一日

一九七〇年(昭和四五年)四月一日格美林大学文学部中国語中国文学科専任講師

◇同年十二月九日長男文献誕生すべから興着とそれに通曉しに賢者のようになることを願って命名。

⑳ 同年十二月十五日「精衛伝説」中国文学論叢二二号 (格美林大学文学部中国語中国文学科)

精衛は鳥の名であるが、天帝の娘が東海で溺死してこの鳥に化して、常に西山の木石をとりわえて東海を埋めようとしたという伝説がある。「山海經北山経」の伝説に基く論す。 (一九七二年(昭和四十七年)二月「古今圖書集成引用書目録稿」一層家編乾象典「古今圖書集成引用書目録稿」中国語中国文学科研究室)

この書のお版に於て、学生が資金金カバをしてくれと感激す。古今圖書集成を中心とした類書研究を終生の研究にする決心をし、今も変らぬ。

㉑ 同年十月 同上、中星辰天河 (同研究室)

『図書新聞』一九七三年十月七日（発売日九月三十日）週刊
 一八二号の旧刊文庫には大事業として紹介される。学生のカンパの外に澤直和氏より無利子で出版資金を提供されるものの恩義に感じ、少しでも研究を遂行させたい。
 この年の十一月一日『日本国語大辞典』刊行始まる。刊行直前まで漢文関係の項目を檢す。記念すべきは六月十日に田中角栄首相と周恩来首相との間で『日中国文』文書が調印されたことである。

②一九七三年（昭和四十八年）四月『国立国会図書館蔵 附音増広古注彙求・彙求和歌・影印と解題（中文出版社）和漢比較文学と漢文の教材にする目的もある。この出版の社長は『古今圖書集成』を買った海風書店の元社長の李廻揚氏である。

③一九七三年（昭和四十八年）桜美林大学助教 東京都立大学 都留文科大 非常勤講師（いずれも二年間）
 一九七四年（昭和四十九年）十月 書評『池田利夫著 百中比較文学の基礎的研究』 国語と国文学 五五卷十号

④（東京大学国語国文学会）
 三月二十一日まで 大妻女子大学 非常勤講師
 一九七六年（昭和五十一年）三月 一九九四年（平成六年）三月

⑤一九七七年（昭和五十二年）三月二十三日
 同年「内閣文庫百廿詠翻字」中国文学論叢七号

（桜美林大学文学部）
 桜美林大学文学部 退職
 桜美林大学（私大）として教師として研究者として田中出の深い学校であった。今でも何人かの卒業生と交流がある。教育

者として色々の実験をさせてもらった。それを実行するに当り教科書類も毎年のように作るようになった。私も学生も若くど希望に満ちていた。大学紛争も共に乗り切った。毎半年合宿し一年に二回遠近の図書館巡りもした。金沢文庫や静嘉堂文庫の名跡稀観書を見、東北大学、名古屋大学、岡山大学の図書館訪問では相手の大学生と交流したり曾の故地、白川の合掌造り、備前焼や開谷学校、岡山藩の藩校）を見学し有意義であった。また同僚にも恵まれ、隣りの中国語中国文学科の初代の主任教授は駒田信三氏で隣りの自宅を訪問したこともある。文人の風ある立派な学者であった。後念であるが学長の清水安三氏と意見が合わず去られたが次に茨城大学から楚辞の権威、星川清芳教授を迎え主任教授は就任。陶淵明の専門家、石川忠久助教が実質的に科目を運営していた。東洋思想の滝澤俊亮教授、中国語学の相田源雄講師、国文学に金子英二教授等諸々たる学者が居た。非常勤講師には金瓶梅の小野忍、東洋史の矢澤利孝、中国思想の中村輝八氏ら深い学識の学者が居た。水経魅力的な学校を去るに忍びなかつたが、ある日成城大学の山田俊雄教授から成城大学に来ないかと電話がありすぐ返事を欲しいと言われた。大学がゴッソリ制かう学科制に移行するに当り漢文教師が欲しいということであった。漢文教師が居ないと国語免許が出せぬというのである。石川教授と相談し、成城大学に籍を旨山田俊雄教授に返事をした。山田教授も伊藤博之教授（成城大学で中世文学を担ぎ）も旧知の仲であり、成城大学も好むべく用いて、ほめて懐くもあった。成城大学に移るに当り桜美林大学の同僚には大変迷惑をかけた。当時の学部長の片岡教授は然るべき人が迎えにくれ許すと言われ、中西進教授が格

美林大学に挨拶に未校し決着した。

十 成城大学文学部部の三十年

◇四十歳より七十歳まで 一九七七年(昭和五十二年)四月一日
二〇〇七年(平成十九年)三月三十日

教授

成城大学に職を得たことを嬉しく思った。国文学科の教授陣は上代中西進、中古池田勉、中世伊藤博之、近世栗山理一、近現代坂本浩、高田瑞穂、国語学山田俊雄の諸教授に新しく加わった漢文学の私とて八人であった。

尾形教授は東京教育大学から来られ、栗山教授の後任であったが得難い先生であったので早目に着任された。老先生は数年後に退任され、池田教授の後には鈴木日出男助教授が坂本教授の後には垣大から東郷克美助教授が、高田教授の後には小森陽一講師が着任し、八人体制を維持した。

私の着任当初、新任は国文学科以外では芸術学科の東山健吾教授、教育学の磯田一雄教授にヨーロッパ文化学科の龜井孝教授(前年着任しアメリカに滞在されていた)であった。後、山田教授が学長になるに及び工藤力男教授着任。

学部部のハイウェイの時、大山学長と話し機会があり、栗山氏と二人で書物に読が及び漢籍が少し、少し買つて欲しいということになった。私はその時、『百部叢書集成』、『同統編』、『三編』、『藝文印刷書館』(はどうか、いか程の価格が等のヤリとりの結果、八百万円余りだと申し上げたところ、よからう着任の褒美だと言われ、見積りを取れ、山本書店から購入した。私はこの叢書と宝物のようか思っていた。うかつにも山田教授に相談せず買つてもらったため、教授は不快であつたらしく、注意

された。今この叢書は利用率が低くとて、調布の貸し倉庫に預けられ死蔵されている。この種の大叢書は手取って見ない

とすまじい使えない残念である。私にそれの代る叢書を購入し、不用はないが学長にどう不便である。他の大学の図書館で使っているという学生もいる。『四庫全書』や『四部叢刊』のCD-ROMが普及している。今どうも金というが、本屋が私としては救然としない。古いと言われるかも知れぬが本は手取つて正しく訓読しないと納得出来る解釈が出来ないと

思ふ。『百部叢書集成』は全書とが叢刊にない養本を収納す。私はこの年の六月十七日に待望の『山海経釈義』の万暦版入版本と『山海経箋疏』の版本を購入した。『山海経』の

原本のテキストを作り授業をした。これから二十数年資料を蒐集してやっと本腰を入れて研究を始めることが出来た。妻は何の文句も言わず買つてくれた。家計に大さな負担をかけた。またこの年、麻生区細山に自宅購入。

②一九七七年(昭和五十二年)四月 平安朝の漢文学、中世の漢文学 『日本文学研究のために』所収(新泉社)

③同年五月 『古今圖書集成引用書目録稿』下巻雲至(大塚(汲古書院))

④一九七七年(昭和五十二年)三月 『類書の研究序説』(魏晋六朝唐代類書略史) 成城国文学論集 第十輯(成城大学大学院文学研究科)文部省科学研究費による研究

この年、坂本浩教授退任、尾形功教授着任
⑤一九七九年(昭和五十四年)三月十五日 父一夫死去
この年、池田勉教授、栗山理一教授退任、東郷克美助教授、鈴木日出男助教授着任

⑥同年三月 『類書の研究序説』(一五代十国宋代類書略史) 成城国文学論集 第十輯(成城大学大学院文学

研究科)

- ②7 同年四月 『百詠和歌注』 (波古書院) 内閣文庫蔵。詠和歌に漢籍の法と典故を加えた。教材にも使った。この書の解題編纂が終った日、二次入試の最終日の夜、父危篤の報を聞き翌朝帰省すも間に合わず死去。この書は採点後微塵でも完成した。
- ②8 一九八〇年(昭和五十五年)三月 『類書の研究序説』(一) 五代十國宋代類書略史「承前」。成城大学文学論集第廿五輯 (成城大学大学院文学部研究科)
- ②9 同年四月 『唐詩選画本』(小林印刷出版部) 『唐詩選画本』を影印し解題と注を加える。教材としても使う。
- ③0 同年四月 『中国古典集成 歳時部』七月七日。(波古書院) 七月七日特に七夕の資料を集め訓点を加え、教材にも使う。
- ③1 同年九月 『梨花(一枝春)春雨(枕蓆)』(子に寄せて) 『楠道隆教授古稀記念文集』所収 (須磨出版社)
- ③2 同年十月 『李太白詩詠法』(一) 乾象十首 成城文芸九四号 (成城大学文学部)
- ③3 一九八一年(昭和五十六年) 高田瑞穂教授選任 (同前)
- ③4 同年三月 『中国美文伝稿』成城国文学論集 第三輯 (成城大学大学院文学部研究科) この稿は昭和五十七年三月二十五日刊『類書に見える美文伝資料』『中国文学の女性像』(波古書院)所収のものに敷衍したもの、出版が遠くた下の前右並にしている。
- ③5 同年三月 『玉造小町社長書』 (波古書院)
- ③6 同年四月 『唐詩選画本』七言絶句 (小林印刷出版部) (一九八二年(昭和五十七年)三月) 『和漢朗詠集私注引用漢籍稿』

成城大学国文学論集第廿四輯(成城大学大学院文学部研究科)

- ③7 同年三月 『絲綢之路—歴史幻想—』成城文芸九十九号 (成城大学文学部) 『唐詩選』中の文物等を考証。鱧魚の鱗、地名等を対象、日本文化との関係も考える。続稿を考えていたが中断。
- ③8 同年四月 『和漢朗詠集私法』(新興社) テキスト版
- ③9 同年四月一日 成城大学文学部教授。同大学大学院文学部教授
- ④0 同年四月 小森陽一講師着任 『研究科教授』
- ④1 同年四月 岡啓基教授、非常勤講師 昭和五十九年三月まで
- ④2 この年九月 『中国漢詩の旅』と『敦煌旅行』を行つた。『漢詩の旅』は東京教育大学出身の先生達を中心にする。上海、北京の故宮、長沙(生ける)が如きミララと見ら、赤壁等を見学。敦煌の旅は芸術学科の大学院生を中心(文化史学科、国文学科の学生が参加。東山健吉教授と私が引率、上海、北京故宮、炳雷寺石窟や敦煌石窟等ゆゑ見学専門家の東山教授の解説に大いに蒙を啓く。以後学生達との旅が事故を起すことを心配して中絶されたことは残念である。
- ④3 一九八三年(昭和五十八年)四月一日より国内研修
- ④4 同年四月二十五日 聖マリア子医科大学病院にて総胆管結石の切除手術を受ける。急性肝炎、肺炎に苦しむ。入院中つて下さり感謝。上原和教授と同僚、学生も訪ねてくれ、人の親切が身に沁める。
- ④5 一九八四年(昭和五十九年)三月 中西進教授 鈴木日出男教授 授選任
- ④6 一九八五年(昭和六十年)十月 『国会図書館蔵和漢朗詠集私法漢字索引』(新興社) 注を加える。

④③ 同年(昭和六十二年) 佐竹昭廣教授着任

④② 同年研究発表「唐詩選画本について」(成城国文学会春季大会) 画本と唐詩選の諸本について語る。後に

佐竹教授に表紙の「楓橋夜泊」の第一句「月落鳥鳴して霜天に満」の鳥が「詠曲等」鳥と異なる理由を問われた。日本の和刻本漢籍の中に「鳥」とした本があり、にわかには殺植とも言えず。ただ中国のテキストには鳥としたものが見えない。日本でこの語が細刻される時に「鳥」と「鳥」に誤り、詠曲等に採用されたのである。あるいは「鳥の方が風情があると思っただけであらうか、私の感覚からすると「鳥」でないといけない。中国ではこの詩によって「啼山」という山がある。

④① 同年八月「唐詩選画本」一七集、解題一冊(鳳文書館)

原本よりや、拡大和装仕立の影印本と解題。

④④ 同年八月(昭和四十二年)一月二十四日岳父文節并各一元去

同年一月三十日 横浜市鶴見区上の宮(三三)四の自宅上樓式、岳父(死去の前に病を押し、地鎮祭に出でられる。七月に転居、新居は書庫に特に力を致す。○置の鉄筋建築に、数台の移動書架を設置する。○七年現在満杯とす。玄關や座敷は、本が溢れ七種)。

④③ 同年二月 「細印玉造小町子壮衰書七種」上(成城国文学論集第十八輯(成城大学大学院文学研究紀元))

④② 同年四月 上野英三講師着任

④① 同年五月「同右」下(成城文芸二九号(成城大学文学芸学部一九八八年(昭和三十二年)三月)「玉造小町子壮衰書研究」(幸地壇上款之賦考)「成城文芸三三三号(成城大学文学芸学部)「幸地壇上款」(曹植路上詠)の意ではいかということを証明しようとした。魏の曹植は、月果天の作品

の伝来以前の上代では人気があった。

④⑦ 同年七月「玉造小町子壮衰書研究統一幸地壇上詠之賦再考」(成城国文学論集第十九輯(成城大学大学院文学研究紀元))

④⑥ 同年(平成二年)三月「玉造小町子壮衰書異文考」(成城国文学 第三輯(成城大学大学院文学研究紀元))

④⑤ 一九九一年(平成三年)三月「玉造小町子壮衰書の研究」上、注釈研究・索引篇 下(影印篇 二冊(臨川書店))。

④④ 成城大学より出版助成を受く、後に学位請求論文として提出。誕生日に合わせて授与された。

④③ 一九九二年(平成四年)七月十七日(成城大学 博士(文学)) 審査教授 主査 佐竹昭廣 副査 伊藤博之、佐伯

有清各教授 伊藤、佐伯河教授はすべて自身能うれぬ境界を異にするその恩義に感謝する。国文学科の第一号として後進に学位を授与するために論文を提出すべしとの事や学位を請求した。本来、類書研究をライフワークとしていたので、とまどいはなかったが、この「玉造小町子壮衰書」を研究していかつたら学位も取得出来な

つてであろう。審査の三教授から以上の方を望まなかった。近い卒業生で 斎藤(中野真麻理(国文学資料館助教授)が「一乗拾玉抄の研究」(臨川書店)で学位を得た。その他の卒業生も何人か学位を得た。

④② 同年八月(日)国文学研究資料館運営協議員(平成十年七月三十一日)に至る。

④① 一九九三年(平成五年)三月三十一日「玉造小町子壮衰書」拾穂の記」(成城国文学 第八号(成城国文学会))

④⑦ 同年五月五日「真知本和漢朗詠集附漢字総索引」和歌要語索引(臨川書店) 天理図書館蔵 佐佐木信

網田蔵本の影印と解題

(26) 一九四五年(平成六年)三月「京大本紫明抄 引用漢籍注証稿」桐登(一)成城国文学論集第三三輯(成城大学大学院文学部研究科)

(27) 同年七月「玉造小町子杜表書」小野小町物語(二)右波文庫(訳注を加文影印本文も付す)

(28) 同年八月「日本に伝来した類書とその効用」和漢比較文学叢書(十八所収)(成古書院)

(29) 同年十月二十四日「聖マリアンナ医科大学病院にて「肝内結石」の手術を受ける。肝臓の一部を切除。八月の夏休中に体の異常にて検査を受けながら、検査を誤る。病中の母を見舞う。十月二十二日激痛救急車にて聖マリアンナ医科大学病院に入院。一ヶ月余り入院休講。

(30) 同年十一月「玉造小町子杜表書」岩波講座日本文学と仏教(第四巻無常所収)(岩波書店)

(31) 同年十二月十七日「母死去(八十二歳)」
九九年(平成七年)天理本河海抄 引用漢籍注考証稿(成城国文学論集 第三三輯)(成城大学大学院文学部研究科)

(32) 同年四月(日)より一九九六年(平成八年)三月三十一日まで国内研修

(33) 同年七月「批葉歌考一何限の解釈」成城文学(一五)号(成城大学文学部)「何」字が「無」の意味に解釈されることについて説く

(34) 同年 學術講演「敦煌百篇篇と国文学について」(和漢比較文学学会 大阪大学)

(35) 同年九月四日より三十一日間 中国研修旅行 簡単な研修報告は一九九六年十月の「国文学科通信」に「研究室から

中国を旅して」に書いている。その旅程は成田空港から北京へ、北京では故宮博物院、天壇公園、琉璃廠、北京図書館、歴史博物館を見学。案内人は張石によって論文を書いたという張松という好青年が就く。日本の歌の好きさや夕子や青年である。この日北京大学に留学中の山崎(現菊地)淑子さんに会い北京大学の図書館を見たり、北京図書館の宋版の「路賓王文集」を調査。資料の全巻の撮影は困難であった。何点か見た本もマイクロフィルムで見せられた。帰国する時上海古籍出版社にて四卷装王文集、宋蜀刻唐人集叢刊(等全四十八冊)を購入し、海運便で送る。天壇公園では映画撮影をしており、周思来、毛沢東等に扮した役者が演じていた。琉璃廠では祝聖、便箋等を見て妻や采女齋美等を買った。中国書店では古書の良質のものがあったが持ち出が困難とて買わず。若盧溝橋は美しい橋であるが、弾丸の跡に、かつての日中戦争を思い心が痛む。近辺にある革命記念館は気が重いが見学した。日本語を話さないように張松君は言う。私の著しみていた北京動物園にはパンダ、レッザ、パンダ川金絲猴等中国の珍獣や珍鳥を見たいが、日本の動物園のように過保護でなく、自然の中で飼育されている。レッザ、パンダは何匹も木の上を動き回っていた。予算の関係で自然体に近いのであろうが考えさせられた。明十三陵の皇帝の墳墓は死後の世界に生活する御殿で立派なものであるが、発掘整備後文化革命により破壊も受けた。明の長城も立派であるが、城郭国家の面目躍如たるものがあつた。

蘭州に飛び炳靈寺に遊んだ。劉家漢から蒸気艇で重り

炳靈寺に行く。兩岸は太古海底であつたというが、山がよつたりと突き出し、桂林の風景を見るような形であつた。この石窟寺院は窟窟があつたらしいが、明代に洪水で流失したといふ。砂岩の山を削り、青きとこに玉蜀黍等とせだ、和土の糊塗像が配置されている。この地は黄河上流にあるが、遊仙窟の舞台であつたともいふ。今は劉家渠ぐみで水量が増し、水没しているが、炳靈寺の城下町として西域に旅する人達の宿場としても賑わつたのである。今は少數民族が多く、岸の土手に穴を掘り、山羊等を飼ひ、自給自足をしている。住居の岩穴の周辺には山羊が群れ、羊の皮袋で作つた袋で河を渡っている姿を見る。炳靈寺には盧舍那大仏が發見されて旅人を迎えてくれる。窟窟の中には何代にも渡り作られた窟仏と見ることも出来る。

敦煌には旧式の飛行機に乗って行く。最初の敦煌行降り、行きは汽車の時は第二次世界大戦の頃のフロベール機で私を降し、酔つてしまひ墜落するかと思ひ、蘭州まで直行できず、酒泉で給油する始末であつたが、今回はプロペラ機ではあるが、少し良くなす。敦煌石窟窟に立派なもので、炳靈寺石窟と若くは破壊を免れてゐた。鐵道が無く、必死で守る人が居たやうであつた。壯嚴な盧舍那大仏寺に歴代諸仏の塑像を目を見張つた。成城大学大学院に學んで、研究員も居て案内してもらつた。夕陽を受けた鳴沙山の邊やかな曲線は幻想的である。

敦煌から柳園までの道は車で行く。旧式の「上海」でセトリックをモデルにしたもの、ドアが壊れていて自ら開けられずいまいであつた。途中漢の長城や烽火台を見る。賦畫の敦煌を油わらせるものであつた。柳園から鐵道で吐魯番へ向く。吐魯番を基点に火焰山、ベゼルク千仏洞、アスチナ古城

交河故城、高昌故城等を見る。火焰山が陽の光を受けて燃える姿は、唐の昔三藏法師が仰ぎ見て仏の光を見たかどうか解らぬが、感激した様に相心像でさる。高昌故城や交河故城も三藏が逗留した所である。今は人ほまぬ遺蹟である。がかつて賑わつた地である。高昌故城では金相丈の西風の原標を見る。ウイグル人の地である。ベゼルク千仏洞は痛まし。鐵道が開通していつたので、紅衛兵が破壊され、壁画は泥が塗られていた。かつてスターリンが壁画を盗み去つたこと、書かれてゐる。が、その惨状は見ても哀れである。街路樹には葡萄が植えられ、青い皮が美しい。新疆ウイグル自治体の都の烏魯木齊に女性の運転手の車に向ふ。周圍は赤茶けた山ばかりで、麓に川が流れていて、そこだけ草木が繁つてゐる。その中に胡楊やスナグメ等が見られ、車から降りて調査したりする。胡楊は不思議な植物で、幼生はヤブ草のように葉が細く、成長すると揚(ポアラ)のまに丸くなる。一本の木に二種の葉が見られる。烏魯木齊に着くと沙漠の中にも、これ程の大都會があるのかと驚かされる。オアシスの町なのである。新疆博物館にはミイラの大展示があり、赤子を腹に孕んだものもある。少數民族の衣装の展示も面白い。カザフ族の故地「南山牧場」へも行つてみる。蜂蜜や羊を養殖したり、馬を飼つていて、觀光用のゲル(パオ包)も置いてあり、家内は子牛に飲れぬより返されたり。西天母の水浴したといふ天池もあるが、日程上行きがず。

飛行機で西安に飛ぶ。西安碑林(古)碑を集めた博物館、兵马俑博物館、秦始皇帝陵、華清池等を見る。今更説明は不要くらい有名な所であるが、私の興味を引いたのはミンミンゼミ系の蟬が盛んに鳴いてゐたことであ

る。姿をあまり見せぬが、鳴き声か西安年かと思つて可笑しくなつた。於て洛陽に出で龍門石窟を見る。すく目に入るのが武則天に似せたといふ處、全郡大仏の温羅である。仏像のみならず書蹟も有名で、ゆつたりと見て歩く。炳雲寺石窟や敬遠石窟とはより精巧に造られていへうと思へる。大仏の温羅が武則天の奇略に似合ぬ。洛陽から鄭州へは車を出き、途中五山のついで、衡山を左に見、拳法の大本山少林寺を右に見て進た。鄭州は河南省の都であるが特に見物もせず。飛行機で河南省の成都に向つ、嵩山大仏を見て、峨眉山に登り、秋明湖の野王麓に美しく、探りまて見られた。大仏も石に刻したものである。峨眉山は途中まで登つて歸り、成都では有名な杜甫草堂を見たり、蜀錦の工房を見、最初の訪問では都江堰を見たり、綿定の老驛を見たりがある。また漢方薬の大市場もあつた。

重慶から三峡クルーズに参加、ゴックリア号という豪華船に乗る。瞿塘峡、巫峡、西陵峡と小三峡を巡り、武漢に着き、黃鶴楼に登る。徐冲別荘博物館に行き、長沙を這うはげまが如きミイラを夜に見学。

飛行機で上海に飛び、上海を経て杭州に列車で向い、西湖遊覧、うね塔(樂園各地の塔のミニチュアも見られる)を訪れ、列車で蘇州に向い、寒山寺や虎丘を見学。上海では黃浦江公園を散策、遊覧機を帰園、三十日余の春を終える。

○同年十二月二十日より十二月十五日までパリ、ロンドン、ウィーンの旅。研修報告は「中国旅行記、パリ、ロンドン、ウィーン、パリオ、スタイン、敦煌文書の調査」と題して、学部長に提出している。詳細は省略。パリの国立図

書館のペリオ文書中の敦煌本百廿詠とロンドンの大英図書館のスタイン文書中の敦煌本百廿詠を調査した。調査に考つては、パリのエコール・ノルマル音楽学校(ペリオ・テイスト科)を卒業したばかりの娘に図書館の手続きをしてもうい、無事目的を果した。後(パリでの娘の演奏会を聴いたり、ライシ)の宮殿やクリムト美術館あるいは楽器博物館を見て歸国、非常に有意義な旅であつた。この頃国文学科の事情が変つた。一九九二年(平成三年)山田俊雄教授が学長に就任され、一九九三年(平成四年)小森陽一助教授が退任し、尾形仰教授の後を受けて宮崎修多講師が着任。一九九三年(平成五年)には國語学の工藤方男教授が着任。一方、東郷克美教授の推薦で石原千枝助教授が着任。その直後、東郷教授が早稲田大学に転出、阿野や後石原助教授(転出時教授)も転出する。一九九四年(平成六年)には山田俊雄学長が任期を終え退任。東郷教授の後を受けて池田一彦助教授が、佐竹昭廣教授の国文学資料館長として退任の後を受けて小林真由美講師が着任した。

(59) 一九九六年(平成八年)一月、「李季端百廿詠」における桃詩についての一考察」中村璋八博士(古稀記念東洋学論叢)。

(60) 同年前月、「李季端百廿詠法解」(一) 坤儀十首(成城文芸部)。

(61) 同年前七月、「フランス国立図書館蔵 敦煌本李季端百廿詠法解」(成城文芸部)。

(62) 一九九七年三月、「大英図書館蔵 敦煌本李季端百廿詠法解」(成城文芸部)。

この年、伊藤博之教授が退任、後任に兵藤裕己教授着任。

についでの一考察上「成城文芸一五七号（成城大学文芸学部）」。パリオに於ては「パリ国立図書館の日本部の小杉兼子さん」に、スタインに於ては「大英図書館の日本部の子イブラヒムさん」の尽力を受けた。また、東洋文庫の松本明氏の紹介状が力があった。感謝申上げ奉る。

⑥③ 同年三月「京大本林葉明抄引用漢籍注証稿 相登(三) 成城国文学論集 第三十五輯（成城大学大学院文学研究科）」

⑥② 同年九月十三日より二十日まで、中国旅行妻と娘と三人、成田発、関西空港經由にて、上海着。上海動物園を見学。ペリカンが空を舞い、珍獣の四不像の群れしているのを見る。中国の動物園の魅力は種類にもよるが、生き生きとしていることである。この後、楽器店を歩き、民族楽器や樂譜を見る。次いで書店、文房四宝の店、博物館等を歩く。書物はあまり破棄なし、異雲で有名な曹素功を訪ね、西泠印景豊を購へ、泉雲軒という文房四宝の店に立派であるが、店頭には大したもの無し。上海博物館に中国有数の博物館であるが、法帖や陶磁器、青銅器等、名品で満ちている。

郊外に出で、上海民族楽器という楽器工房を見学。特に、塗篋を見下す期待する程の出来映えではなかった。中国における楽器の復元を見ること実用を基本にしている。現代楽器と同様、復元を促すような改良、元の形のままに復元することはない。敦煌曲の復元演奏と言っても、敦煌風演奏であつて、限りなく原形に近づけることにはない。

北京では北京音楽院を訪い、学生達の練習風景を見る。河成豊が家庭層出身の人達のように、乃いで右利法海寺や潭柘寺を訪うたが、文化革命の跡が痛ましい。

⑥④ 空襲溝橋や頤和園を見物後、飛行機で北京へ飛ぶ。故宮博物院では楽器館、書画館、珍宝館、陶磁館等を見る。いずれも超一級品で、いつ見ても目を染まそう。万里長城（一般の旅行で行く八達嶺でも）長城を見て十三陵を再訪。琉璃廠を再訪。梁宗晉で地球堂や便箋、給墨堂の類を購入。中国書店で真景と西泠印景豊のセトを購入。他に輝の文鎮を手にする。北京動物園も再訪。パンがらみの他の中国の動物を見る。三月二日に帰国。

⑥⑤ 一九九八年（平成十年）二月「百年歌の研究」陸機「百年歌」数種本百歳篇を説く。成城文芸一五八号（成城大学文芸学部）古人の人生観から我が身を省る。

⑥⑥ 同年五月二十日「長男文獻永賦」三才歳

⑥⑦ 同年八月一日「關雎の和漢比較文学序説」關雎説話の源流と日本文学。和漢比較文学二二一号（和漢比較文学会）粟平の八十島の「秋風の吹くにつれてもあやめく」といふ歌の故事を梳いて和漢比較文学的考察をする。

⑥⑧ 一九九九年（平成十一年）二月「女人百歳篇 九想詩」四人生の階段 今口首むらけ今 止所収（福音館書店）

⑥⑨ 同年三月「京大本林葉明抄引用漢籍注考証稿 草木甲」成城国文学論集 第三十五輯（成城大学大学院文学研究科）粟平は平成五年三月論集第三七輯。

⑥⑩ 同年三月「石海文庫貴重書書誌解題」古活字版の部(三) 東洋文庫書報三三三号（東洋文庫）

⑥⑪ 同年四月一日より二〇〇三年三月三十一日まで「国文学研究九委員」料館客員教授。

⑥⑫ 同年七月「漱石と石鼓文の装幀」成城文芸一六二号（成城大学文芸学部）漱石が「石鼓文」に相思を得て

装幀を試みた。心と死後出版された『漱石全集』
ヤ『漱石』の思ひ出。の石敷文による装幀について、その異
同等を考察した。漱石作品の装幀と本文は表情や
衣服と肉体のように深い関りがあり、漱石そのものを体
現したものと云えよう。

○同年九月二日より九月十九日まで「三國志・漢詩の舞台、
三賦を行く長江三賦」を特別文化講座（NHK文
化センター）に、私は「三國志」を担当、二松学舎大学の吉崎
一衛氏が漢詩、日本自由画壇理事の中村三木（三郎）氏
が水墨画を担当、講座を開いた。旅程は成田空港から上
海に行き、飛行機で重慶に飛ぶ。長江三賦のクルーズが若
る。瞿塘峡、巫峡、西陵江の三賦と小三賦と旅（蜀の劉
備、吳の孫權、魏の曹操が霸權を争った。三國志の世界
を思ふ。孝節、白帝城、雲陽の袁飛廟、秭帰の屈原祠
を通り、荊州博物館を巡る。赤壁では古戦場の跡を見物。
武漢はてくれ、大も終り、普鶴梅や湖北省博物館を見物。
バスで上海に至る。上海の夜は外灘を散歩したり、平和飯
店でオールドジャズを聴く人もあった。安陽方面で調査を
して、地味な途中交流会。参加者の中には今も交流がある。

(20) 同年（平成十二年）三月「漱石山房の原稿用紙のゆかりが
こ」
『国文学研究資料館紀要』二〇号（国文学研究資料
館）漱石が自家用の原稿用紙に用いている「双龍
奉獻（争）珠の図柄が何い由来しているかを明らかにす。
漱石や橋口五葉が見た図柄をなるべく集め、結論として
江戸安永時代和刻の『康熙字典の肉麻の双龍奉珠
の図柄が最も近いと結論づけ。』
○同年五月二十八日「研究発表『南船北馬考』（全国漢文教育
学会大会、東京学芸大学）

(22) 同年九月「猿投神社蔵白氏文集卷三、貞祐二年点」本
文・翻字・訓点文「国文学研究資料館文獻資
料部調査研究報告第二十一号（国文学研究資
料館）」

○同年九月一日より九月九日まで「麦積山石窟と敦煌石
窟の旅」東山健吾氏が案内する。といひて書と私と
二人で参加。甘肅省天水市・南東にある摩崖雕刻の
麦積山石窟。初めて見ると石窟の姿に強い印象と学究
心からバスで出発。七時間くらい乗って敦煌に到着。
途中炳靈寺に寄り、榆林窟も経て敦煌石窟窟
に至る。麦積山に至る前に西平に寄り、兵馬備や
華清池も見ながら省略する。この旅程は従来のバス
と異なり、魅力のあるものであった。列車の旅も土地の人と
親くなり、有意義であった。

(23) 同年十一月二十日「南船北馬考」漢字漢文教育二一
号（全国漢文教育学会）「南船北馬」という語の
源流を『三國志演義』に求める。明治期に日本の
用例が見られる。
○二〇一二年（平成二十四年）四月一日より二〇一三年（平成二十五）三
月三十一日まで「国内研修」

(24) 同年三月「成城大学図書館蔵『怪奇鳥獸図巻』における
鳥獸人物図の研究稿」成城国文学論集第二八輯
（成城大学大学院文学研究科）二〇一三年（平成十五年）
成城国文学会、夏季大会において同題で講演。同巻
に見える鳥獸のルビを『山海経』、『三才図会』等々検
討。同年四月「工作金刊の図巻の影印本について書評」。
○同年四月十四日より十四日まで「山東省の石碑と求めて
の旅」研修を兼ねて書家の印南漢峻峻氏と仲間

書家や孝子の方々と鄭道昭の石刻碑を求めて旅をする。先ず青島に行き、次いで天柱山に向う。この山は禿山と麓に一面葡萄園、鶴の飛空が目立つ。この山に鄭道昭の碑がある。この碑を守るため、鞠堂が建てられている。天柱山から見下すと土を盛り上げただけの墓碑が見える。碑の側には「上遠天柱下息雲峯題字」と石に刻してある。碑面はあまり鮮明ではない。続いて大基山に登る。ここには馴染み深い鄭道昭の石刻碑が見られる。道は雲峯山に転じると、この有名な鄭道昭の碑が見られる。独特の大方な字は一度は書いて見たくなるもので、法帖の形で我々に親しまれている。この碑は「雲峯山鄭文公碑亭」に保護されている。これら鄭道昭の自筆とされているものが他の書いたものとする説が出されているが、碑の価値が下がらぬものではない。論語書詩や「親海堂詩」等をたゞ堪能して「鄭文公碑」を後にして、濟南へ向う。道の両側には桐の葉が映え、野草を栽培するビニールハウスが目立つ。少東の桐は日本においても古来親しまれ、中国野菜と言え、山東省を初め多く輸入されている。道中、青州博物館、立ち寄る。古い瓦片、碑、紅砂石の山形硯等多彩である。鄭世寧の「百駿図」が面白かった。画像も山東省は空庫である。その影印本も売っていたが、数量が多過ぎる買わなかった。後に日本で購入した。石刻博物館も見ると、名勝大明湖にも珍奇。柳絮が舞う姿が春を思わせるものであった。山東省博物館の名品を見ていよいよ春空に至り、岱廟に着く。「第一山」と書いた米芾の字を刻した碑が目に入る。第一山とは泰山のことである。下界から見る泰山は神々しい。泰山は歩いて登りたかった。七時間も要するといふので諦めてケーブルカーで登る。連翹の黄色が木々

の緑に映えて美しい。山頂に至ると刻痕が多く、四周の展望もすばらしい。なに行き跡には歩いて登山し、山上のホテルで一泊し、日の出が見たいと思つた。初めての泰山は一回感激頻りであった。

下山して孔子廟堂に参拝する。千年の老柏が印象的であったが、「論語」を学んだ身をして孔廟に参拝し心持ちは同教徒がスガクを自指し旅するの如い。孔廟のある曲阜は中国のゴラクである。子貢手植楮（楮はヒキの一種）、孔子墓を拝し、漢魏碑刻陳列館を見て暮田峪長城に登る。北京郊外の八達嶺の長城とは異って山東の如い。ここから印南さん一行と別行動を取る。胡同に行き、京劇のセリフと胡弓の演奏を聴き、京廷料理を食す。北京歴史博物館も見れば北京を語る。

上海に飛び、杭州に乗り向う。道の周辺は部品等の製品で、利を得る農家の何とも口げげしい居るを聞いた。建物も林立せ、もはや農業を止めた。旧知の黄宗初氏に再会し、西湖を散策する。ホテルで渡派の蘭亭碑を買った。古刹の密隠寺や西冷印社を訪う。鶯の鳴き声も聴きながら、がながな巡り合はす。一度だけ幻聴かも知れぬが、耳に耳にした。密隠寺の参道で竹笛を買った。これが鶯の鳴き声のような音色を出す。高麗宮と違い、月夜と同じ音も居るが、中国人はその鳴き声に関心を示さない。中国の鳥類学者に聞てみたい。西湖十景の一つ「柳浪聞鶯」の當は高麗鹿鶯（黃鸝）である。

杭州を後に上海に乗る。途中、島鎮に立ち寄る。水郷の都で昔は交通の要衝で、今は觀光地として栄えている。ここ

て吾の最翰の故事と有名を松江の鱸魚を食したや、夜念ず
かり鱸(「養求」)は「張翰通意」に見えてはなかつた、かく
て上海より空路帰国した。

○(三〇三年)平成十五年(二月十五日)より二十三日まで、瀟金絲猴を
求めて雲南の旅を家内(二人)とする。かくて成城大学在籍
最後の研修旅行を終る。旅の顛末については翌年に書いた。

○(三〇四年)平成十六年三月「瀟金絲猴を求めて」雲南の旅」
瀟金絲猴を求めて「雲南の旅」に詳しいの省略する。
成城国文学 第二十号(成城国文学会)

○(三〇五年)平成十七年三月「瀟金絲猴を求めて」雲南の旅」
成城国文学 第二十号(成城国文学会)

○(三〇六年)平成十八年三月「瀟金絲猴を求めて」雲南の旅」
成城国文学 第二十号(成城国文学会)

○(三〇七年)平成十九年三月「瀟金絲猴を求めて」雲南の旅」
成城国文学 第二十号(成城国文学会)

○(三〇八年)平成二十年三月「瀟金絲猴を求めて」雲南の旅」
成城国文学 第二十号(成城国文学会)

○(三〇九年)平成二十一年三月「瀟金絲猴を求めて」雲南の旅」
成城国文学 第二十号(成城国文学会)

○(三〇一〇年)平成二十二年三月「瀟金絲猴を求めて」雲南の旅」
成城国文学 第二十号(成城国文学会)

○(三〇一一年)平成二十三年三月「瀟金絲猴を求めて」雲南の旅」
成城国文学 第二十号(成城国文学会)

有記念文集。所収「記念文集編集委員会(駒沢
大学内)私の所持する、泚河緑石硯(瓦様硯)に「壽古而
質潤、色正而聲清、起墨宜毫、故其質貴也。襄陽米
芾銘(壽古として質潤、色正として声清し。故に其れ宝
貴。襄陽米芾銘)」と刻してある。この硯が米芾の
ものか、米芾の文集には見えない。故官に所蔵されてた名
硯を模写した譜本「西清硯譜」(四庫全書)所載に康
熙帝の「松花石双鳳硯」があり、米芾の第二句「正に
対するものが、緑とをこいて、他は同文である。これが偶然の一致
であろうか。康熙帝が米芾を真似てこの銘を書いたと
も思えない。毫阜有硯譜(上海書店)に毫阜の有名
宋硯としての、清の有名書硯家の翁方綱の銘と錢
泳の銘が見える。実は私も米芾と乗換へずれり北宋末の文
人と愛硯家である)の銘と翁方綱の銘を削った跡のある
本文硯を所持している。米芾の銘が本物かどうか疑問が
解けない。その厄えを期待してこの稿を書いた。

○(三〇一二年)平成二十四年三月「瀟金絲猴を求めて」雲南の旅」
成城国文学 第二十号(成城国文学会)

○(三〇一三年)平成二十五年三月「瀟金絲猴を求めて」雲南の旅」
成城国文学 第二十号(成城国文学会)

○(三〇一四年)平成二十六年三月「瀟金絲猴を求めて」雲南の旅」
成城国文学 第二十号(成城国文学会)

○(三〇一五年)平成二十七年三月「瀟金絲猴を求めて」雲南の旅」
成城国文学 第二十号(成城国文学会)

○(三〇一六年)平成二十八年三月「瀟金絲猴を求めて」雲南の旅」
成城国文学 第二十号(成城国文学会)

○(三〇一七年)平成二十九年三月「瀟金絲猴を求めて」雲南の旅」
成城国文学 第二十号(成城国文学会)

○(三〇一八年)平成三十年三月「瀟金絲猴を求めて」雲南の旅」
成城国文学 第二十号(成城国文学会)

○(三〇一九年)平成三十一年三月「瀟金絲猴を求めて」雲南の旅」
成城国文学 第二十号(成城国文学会)

○(三〇二〇年)平成三十二年三月「瀟金絲猴を求めて」雲南の旅」
成城国文学 第二十号(成城国文学会)

○(三〇二一年)平成三十三年三月「瀟金絲猴を求めて」雲南の旅」
成城国文学 第二十号(成城国文学会)

◇同年四月七日 癌研究会有限病院にて、縦隔脂肪肉腫の摘

出手術を受ける。消化器外科瀬戸泰之、福田俊内医師執
刀、院長の武藤徹一郎医師、呼吸器外科の中川健一医師等
の見守り中、今時間余り、無事成功。手術の成功を祈って
佐竹昭廣御夫妻が、病身を押し、法皇さまに参拝、お札とお
守りをおもらして送って下さる。感激です。また善養寺の勤王女彌
さんや、西宮神社(重虎寺)と長野善光寺のお守りもとれる。
神戸の山本夏江さんも須磨の多年烟の厄除八幡宮のお守り
も送ってくる。いつも袋に鎮座まじまじと身につけている。窮
屈な僕であるが、温かい思いが籠っている。退院前日には昔の
クラスの卒業生や大学院生も人が猿の縫い包みとアクリルを
張った水族館風のポッドを持って見舞ってくる。氏名は省
略する。が日記帳を見ながら嬉しく思う。

◇同年四月十七日 退院この病院に手術希望者多く一週間の院

が原則であると共に手術を受ける人は給て癌患者である。
退院後、前期の授業は同僚の小島孝之上野英二宮崎
修多小林真由美の諸先生に代講してもらい、池田(孝主
任)や工藤カ男教授にも助力を得た。また学部長の元都
順教授を初め多くの同僚に親切にまを掛けてもらった。
お陰で後期には何とか授業を親切にまを掛けてもらった
のみならず、また試験監督は池田主任、小島教授が宮崎
教授、小林真由美助教が替ってこれ感謝している。入試
業務も終に免除された。最終授業の日花を贈ってくれた
学生もいる。同僚や学生への温もりを感じている。

◇同年十一月十七日 労働永限 三三歳

◇二〇七年(平成十九年)三月三日 最終講義、その後七号館ラ
ンジで懇親会

◇同年三月三日 卒業式

◇同年三月三十一日 停年退職

十一 成城大学文学学部三十年のしめくり

- (A) 私の研究の一 『古今圖書集成』の研究 ①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺
- 私の研究の基本的考え方は中国の古典とそれにより推し進める歴史文
に対する疑問の解明であり、その対象は歴史や思想、絵画、食
物その他、天地人すべてに関わるものである。中国の文化を知るに
は万物を集大成した類書の研究が第一である。故に終生は『華夷考
』、『海経』や『李鴻百字訣』等の研究も、類書研究から派生しに
ものである。類書に類聚された資料と訓詁法による正確な訓
みから出版する。私の類書研究の基本文献が中国最大類書
『古今圖書集成』一万余巻である。私は類書の書誌研究をする
一方向、圖書集成の『乾象典』の引用書籍の内容が理解できな
うにした引用書目録を作ることから出版した。『乾象典』は天地
人の天に当る天文関係の資料である。『中園古史集成』は天地
日は、類書中の七月七日(七夕)関係の歴史資料の読解を試
みたものである。(○内の数字は年譜中の論文類の番号)
- (二) 私の研究の『李鴻百字訣』の研究 ㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺
- 唐の李鴻の百千首の題詠詩は三言律詩である。一種の類
書である。日月星辰・山石・原と故事とちりけり(一詩であら
この詩を文献学的に考証し、典故求め法教を加える研究である。
- (三) 私の研究の『山海経』の研究 ㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺
- まほ怪、伝奇小説の研究の典拠として、あるいは「精衛伝説」
等の研究から出版し、『山海経釈義』や『明刊本』とそれに基づ
た研究の画像の研究を行う。歴代の諸法の集大成と動植物の
研究に当り、実地の動物を可能を取観察して科学的に研究する。
一方で考古学的立場からも研究する。「金絲猴」の調査もマ
の。また画像の考証に基づく「山海経絵巻」を完成させていた。

(四) 私の研究の四 『京大本紫明抄』引附漢籍注考証稿。

この研究は大学院の修士論文③を發展させたもの。統稿の發表が遅れている。日本女子大学の大学院において讀じていた。『源氏物語』に用いられた漢籍と『源氏物語』の古法の『紫明抄』と『河海抄』による研究。

(五) 私の研究の五 『玉造小町子表書』の研究 ③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿

小野小町の伝説の一つ。小町の人生の盛衰と物語にした漢文物語。伝説と海外とも言われているが、これは空海に仮託したもので、九思詩の影響を受けて、仏教を其基にした作。『学』位請求論文。

(六) 私の研究の六 『和漢朗詠集』の研究 ⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿

八巻の編んだこの書は後世の文学作品によく引用されるアンロシーであり、平安時代の教養書である。和漢比較文学の研究と教材としても大かすことが出来る。

(七) 私の研究の七 『唐詩選』 ㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿

いずれも唐代の詩と教養を知るための基本的な教科書である。毎年教材や大学院の入試に用いると共に和漢比較文学の研究に欠かさない書物で、これを研究した。

(八) 私の研究の八 『唐物語』 ㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿

『私の研究の八』『唐物語』②③④は中国説話のアンロシーである。中国文学科において比較文学の授業とすうために始めた研究。國文科でも教材に用いた。一連の中国説話の研究⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿はいずれも和漢比較文学の立ち場や行った。いずれも教材として用いた。『百年歌』の研究②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿は永年走り続けに人生を立ち止って振り返ってみようと思つたこと、学生にも今の己を考えてもらいたいと思ひ研究してみた。統稿も考

えている。学生と授業をしている時思ひ着いた事や学生の質問について書き研究したものもある。③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿これらに収めず予定である。尚一九九一年二月二日に発行された『大学源』(角川書店)の漢籍關連の資料の調査を依頼された際、『角川大学源』特集『漢文と辞典』(國語科通信)の一九九一年号(三)角川書店)という企画に「踊り字考」という小論を書き、「踊り字」(ハム、タ、タ)について述べたことがある。歴代の『和漢朗詠集』代々説々書きされた。や『石鼓文』の用例多用い「踊り字」が歴代どのように使われたかを論じた。他に漏れたり言及しないものもあるが、教育の過程に生れた論文や研究も多く学生や大学に感謝すべきである。尚思ひついた資料は各々ファイルに整理してある。

(B) 成城大学における研究会の文化の型 について

一九八二年(昭和五十七年)より二年間、成城大学の特別研究費発足。初回(一)による研究会や、他学部の教員を加えて発足した。西山松之助教授を中心とした約十名が参加した。その詳細は『成城文芸』(七号)「文化の型」特集号で詳し。事務は我妻建治教授が統括された。研究の担当は西山松之助「吾能文化の型」、中西連「ワ葉一つの型」、上原和「法隆寺の柱」、松庭信之「絵巻の型」、大庭勝「仮面と邪惡」と、石川弘毅「天原文化の型」。伊藤博之「山中他界觀と中世の繪物」、栢尾武「生元觀の型」、尾形功「芭蕉西鶴の時代と交流の型」、我妻建治「北島親房と易」、東山健吉「敦煌の文化の型」、齊藤藤忠「随平リヤ文化の型」、野口武徳「トイレット文化の型」(東浦)、上野格「アイランド文化の型」、杉山隆彦「反文化の型」(トイレット)、森岡清美「教團のライフスタイル」、田中日出夫「唐礪師としての光悦」近代絵画と消えて行った秀才」等多岐に渡つて来た。

この研究会の再期的な所は、各分野の研究者が独自の研究を展開発展させたことである。今後このように企画や再び持たれることが期待される。森岡先生は今の御免死で学校にも時を空を見せられ、研究を続けられ、講演集を生きたる(三月十五日)八月刊)を出されてゐる。研究会では文化の一つの型を見よにめ長崎のぐらべー亭や文化遺跡を散策、五島列島に船で渡り、福江を基点にきり入つた足跡をたどり歩いた。西山先生を初め多くの参加者と心の交流も出来た。

[C] 東洋文庫と岩崎文庫貴重書書誌解題

岩崎文庫の解題付の目録の企画を始めたのは龜井孝教授である。岩崎文庫貴重書書誌解題稿(一)(東洋文庫書報第十七号)東洋文庫一九八五年(昭和六十一年)三月十五日刊)の序文を龜井孝教授は「夙に東洋文庫蔵岩崎文庫本は、和田維四郎・新井白石・小野蘭山・木村正幹・有賀長雄著の有名な蒐書家の旧蔵に係り多くの古写・古刊の貴重本を含むこと以て知られ、モリソン文庫と共に学文庫の誇り(大蔵森蔵の意)なり。既に昭和九年(三月)に岩崎文庫和漢書目録の公刊あり、其の際に序に言へるが如く岩崎文庫に属する圖書の多くは解題を必要としてゐり、其処に於て刊行を期し、この解題書目録未刊のままに鑑み、東洋文庫研究部日本研究委員会との協賛で、酒井憲三・石塚晴通・林望の四研究員により、今日の書誌研究に則り、書誌解題を新たに編纂することに成り、右記の如き有名蒐書家の旧蔵に係り多くの貴重書は、種々の分野の基本図書にして、その原本調査に其書誌解題は少なからぬ研究分野に互ら基蔵資料となり得るものなり。宇野、本事業は昭和五十九年度より着手し、昭和五十九年度は石塚晴通が担当に属する古写本の部(全書目録)を報告するに迄なり」と

三編)と述べてあり、この解題の注目が解を、次に書誌を記す。岩崎文庫貴重書書誌解題稿(一)に鎌倉期(南北朝)石塚晴通担当、東洋文庫書報第十七号、一九八五年(昭和六十一年)三月十五日

○ 同解題稿(三) 空町期 桃山時代(酒井憲三・杉尾武柳田征司・石塚晴通担当) 東洋文庫書報第十八号、一九八六年(昭和六十一年)三月十五日

○ 同解題稿(四) 二古刊本の部(余良朝(石塚担当)(鎌倉時代)(石塚、杉尾、林、酒井、柳田担当) 東洋文庫書報第十九号、一九八七年(昭和六十二年)三月十五日

○ 岩崎文庫貴重書書誌解題(二) 古写本 古刊本(龜井孝・佐竹昭廣・酒井杉尾柳田石塚林、山口謙司共編) 東洋文庫日本研究委員会一九九〇年(平成二年)五月十五日

○ 岩崎文庫貴重書書誌解題稿(一) 松橋本の部(一) 国宝・古文尚書・国定文記・夏本紀・同本本紀 石塚晴通・東洋文庫書報第二十五号、一九九一年(平成三年)三月十五日

○ 同解題稿(一) 古活字版の部(一) 柳田(石塚担当) 東洋文庫書報第二十五号、一九九三年(平成五年)三月十五日

○ 同解題稿(一) 古活字版の部(二)(三) 古活字版の部(四) 古写本、古刊本補遺・中国写本、除外本、者略

○ 岩崎文庫貴重書書誌解題(二) 研究員にも異なり、林望氏が退き、龜井孝氏が未眠、上野英二宮崎修多、中野現齋藤一真麻理、松田米幸、辻本裕成、深沢真二、今西祐一郎氏と磯部祥子氏協力を加へる。またプロジェクトの良き理解者の松本明氏も退任。事業も近世之部に至つてゐる。成職大字関係者も多数加わつてゐるとは心強いことである。七巻井先生に合掌。

○ 同解題稿(一) 古活字版の部(一)(二) 者略